
魔王様みーつ人外

瑞珂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様みーつ人外

【Nコード】

N7150P

【作者名】

瑞珂

【あらすじ】

異世界トリップ（魔王ver）って、人外な美人達に遭遇するのが普通だと思っんです。…一応この状況、人外な方々に囲まれてます。ええ、文字通り『人外』です。

序章 魔王様の眩き

ある世界では、天使と悪魔が敵対している。
また別の世界では、翼族と地族が敵対している。

これは、それまた別の世界の話。

異世界トリップ。

それは、夢見る年ごろの者ならば誰でも心躍るフレーズではないか。
その先に待ち構えている物を考えず、目先の『ファンタジー』に焦点を当てれば、一度でいいから経験してみたいものだろう。…危険がなければ。

正義の味方なる、勇者。

これに憧れるものも多いのではないか。

普段の世界では普通の人だったけど、異世界に行ったら『俺つえええ！』なテンションで、武術に魔術もろもろオールオツケーでウハウハ・美形ハーレムなぞ作れるものなら、諸手を挙げていきたくないのが、普通の人間である。

一握りの者は、魔王に憧れるだろう。

怜悯ともとれる美貌・深淵をのぞくような黒。

これに痺れるものもいるだろう。

魔族は美形が多いとも聞くので、そんな彼らに傳かれるのも悪くないと考えるのは致し方ない。

しかし、トリップ補正ならぬ向こうと同じ姿をした人間が、超絶美形ども（人外）に傳かれるのは、精神衛生上とてつもなく悪い。

…いや、だからこそウハウハなのか？

さて、皆さんに報告しよう。

私、瀬戸悠は異世界トリップして、魔王になりました。

ただし美形はいません。

いるのは人型ではない魔物たちです。

序章 魔王様の眩き（後書き）

見切り発車！

多分ギャグになります。

ときたまシリアス……？

魔王様の回顧めもりー 1 (前書き)

魔王様は女の子です。

ちなみに、「はるか」と読みます。が、魔物さんたちには「ユウ」と呼んで貰います。

理由は後ほど！

魔王様の回顧めもりー 1

こちらの世界に来た時の事。

その時、私は高校生でした。

中学の時は真面目一直線でしたので、どうしてもサボりをしてみなかったのですよ。

素敵なロマン！高校生だからこそその価値があるってもんです。多分。健康なのに、保健室のベッドを利用する。

ずっとやってみたかったですよ。

てわけで、イキイキと保健室に入室しようと思いました。

するとボールが二つ飛んできて、同時に両方あたり……………今考えると、悪意しか感じられませんか。

そして目を開けたら、森の中でした。

なんてことがあるわけない。

実際は、目を開けたら水中でした、だ。

詳しく状況説明すると、私in水中。つまり私の異世界トリップの最初では、溺れかけてた…というか溺れたのです。

こんにちは異世界。着地点て大事だと思う

普通、異世界トリップしたら神殿とか森の中だと思います。
しかし…水中。足すらつかないってどういう事でしょう？
ちなみに私、泳げないんですけどね。

息継ぎが出来ないので、バタ足で行ける所まで泳ぎましょう。

……………溺死って、一番苦しいそうなので、マジで遠慮したいから
死力を尽くして泳ぐ！

つかさ、溺死が嫌だから海とか川から離れたところに居を構えた
のに、何故溺れにやなんのかね畜生！

この状況に陥らせた原因の奴マジで殴る！

肉体のみならず精神も攻撃してやる！

『心をヤスリで抉るようだ』と、友人に言わしめた私の嫌味をおみ
まいしてあげようかねええええぐぶふおおお！！！！

「…アンタ、大丈夫か？！」

いきなりザッパーンと体が浮き上がった。

こんなにちは空気。O2大好きだよ。

人間で陸上生物だよね。ああ、空気がおいしい大気圏万歳！

あーもーさっきから水滴が流れてるよ。

さっきまでいた水か涙か判らない。

が、とりあえず空気愛してる。

「おーい」

「…はいつ?!」

なんだどうした誰だ。

いきなり声が聞こえたので声が裏返った。

声のする方を見るが、いない。

下を見ると、木のボートだ。

誰かが載せてくれたらしい。

「えーと、大丈夫か？」

「?…もしかして、助けてくれた？」

「一応。溺れてたみたいだし」

姿の見えぬ者との会話。

シャイなのか？

声の感じからして、若い男の子の声だから純情ボーイなのかもしれない。

どちらにしろ、

「助けて頂きありがとうございます。」

しかし…顔を見せてもらわないと、お礼が言えないんですけど……」

純情なのは判ったから、お姉さんに顔を見せてくれよ。

異世界Ⅱ美形わんさか

っていう公式の成り立っている私に、顔を――――！

魔王様の回顧めもりー 1 (後書き)

ははは。終わるかなあ？

お気に入りありがとうございます！
とても嬉しいです…はう

部下泣かせの魔王様は回顧めもりーを語ります（前書き）

放置しすぎでしたね

読みづらくてすみません

部下泣かせの魔王様は回顧めもりーを語ります

「そして今に至る…と」

「待つて！はしよりすぎだから何が何だか分かんないっていうか泳げなかったんだね魔王様！」

ノンブレスもとい、一息で突っ込みを入れる部下ディーベアに、称賛の拍手を送るのはこれまた部下のナディアスキーファ。

今、くまのぬいぐるみを想像した人、ある意味大正解。ナディアス（通称ナディ）がクマのぬいぐるみの姿をしていて、ディーベアがゲル状…げふん、スライムです。

……嘘です。ちゃんとぬいぐるみがディーベアで、スライムがナディです。すみません、調子に乗りました。ちなみにお二方ともです。

スライムなのに拍手が出来るのか、と思う貴方、何故か出来るんです。ゼリーとゼリーが勢いをつけてぶつかることにより、空気抵

抗の関係で……ごめんわかんない。なんかそんなことをアリ　ちゃんが言っていました。あ、アリ　ちゃんて言うのは、ピンク色の蛇さんです。

最初に会った瞬間、思わず腰を上げてしまった私は悪くないと思う。

だって大蛇なのだ、アリーちゃんは。

想像してほしい。パルテノン神殿の支柱ほどもある太さの胴体をもつ大蛇を……しかもピンクなのだ。ショッキングピンク！！！！！！

怖いでしょ？絶対怖いよね？そうだと言ってよおおおおお！！！！！！

これをクマ（ティィ＝ベアの愛称。英語の大嫌いな私がティなんて巻き舌出来ないのさ、はっはーん！それに、本人に『奇妙な発音で名前を呼ばれるなら、屈辱な呼び名でもかまわない』と言われたらそう呼ぶしかないでしょ……。……そこまでひどかったか私の発音）に言ったら、頭をはたかれて「何言ってやがんだあんた！」と怒られました。ひどい。

そして「ぬいぐるみのくせに」と呟いた私に、さらに一発食らわせてくれやがりました。

いや、私が悪いのはわかってるんだけどさ、一応私、権力者というか王様ね。『魔王』とか呼ばれる存在なのに、部下に暴力振るわ

れるとか何事よ。

しかも見た目ぬいぐるみなのに、こぶしが固いというか…うん、見た目にぞぐぬ重いパンチ。

ぬいぐるみに虐められている私を見て、ナデイが半透明の体をプルンと揺らしながら、思案気な色をした。『考え中』というテロップが体表を駆け巡る。いやマジで。

気になったので声をかけると、ナデイは何とも言えない顔で私に質問した。

「魔王様、私の姿はどう見えますか？」

「え、うつすら紫色のスライムじゃないの？」

「「え」「

はもるなそこ。疎外感を感じるじゃないか。……いや、見た目からして疎外されてるが。

「いやいやいや、種族の問題じゃなくてですね、ナディアスの見た目を……」

「いや、だからスライムでしょ。…今は少し黄色っぽくなってるけどさ」

クマが、「まじかよ」とつぶやいた。なんだどうした。

「えーっと、魔王様？テディの外見とかも教えてください」
「くまのぬいぐるみのテディベア。目の色は紺色で、銀に近い色の毛。」

ナディが「ええええええ」とつぶやいた。なんだどうした。

「ってまさか魔王様、だから俺のこと『クマ』って?!」

「それ以外何がある」

「名前からじゃなかったのか?!」

「それも含めてだけど」

クマがよろよろと後ずさった。

『マジありえねえよ。この人もうやだほんと』とか、ぶつぶつ呟いている。しかしその姿は愛らしい。

こっちこそやだよ。もう何これ意味わかんない。いい加減仲間外れにしないで。魔王様さみしい。

「なあテディ、私はまだ魔王様に種族を言ってなかったんだ……」

「つーことはつまり、アレか」

「ええ、確実にアレです。まさか本当にいるとは思わなかったというか、ここまでイレギュラーじゃなくてもいいというか……」

「もうやだこの魔王」

しくしくと泣き始める二人。

うん、すごく貶されてるよね。

とりあえず私にわかるように説明しろ

ということがあったなあ、と思い返した。

回想が長くて申し訳ない。

まあ、簡単に今の状況を説明すると、異世界トリップして溺れかけた私がいつの間にか魔王になってたんです。

それで、私はものすごく不条理な存在らしくて、『マジ勘弁してください』と部下に泣かれました。

…普通そこは崇め奉るところでしょ。魔王なんだし。

え、偏見？

いえいえ、この世界は実力社会なのです。

部下泣かせの魔王様は回顧めもりーを語ります（後書き）

主人公が自由人過ぎて、筆者泣かせです。

部下も泣かす主人公……。うん、それは不可抗力だけどね

魔王様の眩きは偏見ですよね（前書き）

魔王様の愚痴です。

彼女は美形観察が好きなんです。

美形＝観賞用です。

魔王様の眩きは偏見ですよ

「魔王殿、今日もお美しい」

はいはいはい、私の外見は平々凡々ですから

「本日も魔王様のご威光が輝かんばかりです」

お前の頭も輝かんばかりだよ

ただ今、国の中枢を担っている大臣どもの息子供に言い寄られてます。

もちろん人外な方々ですが何か？

ほんとさ、いい加減人型の魔族に会わせてくれないかな。

二足歩行のトカゲとか、頭ライオンで下半身は鳥人とかはもう見飽きました。

人型プリーズ。

異世界って、美形のオンパレードじゃないの？

いや、わかってるよ。美醜の基準なんて一定ではないことくらい。

しかし、そこは異世界補正で私基準とかにならんのか？！
こつち基準の美形でもさ、人型でなければ意味ないよね？

ああ、本当に……私のうるおいは何処

！！

あ、そういえば上級貴族になるにつれて皆、美声度がupしてるんだけど、これって何かね。

『きゃっ、やだ美声イケメンボイス（はあと）』とか思って振り向いたら、人間じゃないの。

……ええ、文字通り人外さんですが何か？

異世界の醍醐味・美形観察のできない私って何かしら……。部下の皆は、私のせいなんだって。つまり自業自得？らしい。私何もやってないのに　！！！！

てわけで皆さん！！

もし貴女が異世界へ行つて、美形に遭遇したら喜びましょう！！！！神へ感謝、ってやつです。

……もし、私のように美形に遭遇できなかったお嬢さんがいたら、同盟組みませんか？

その名も、「召喚者ばかり隊」同盟です。

魔王様の弦きは偏見ですよね（後書き）

今回の魔王様は、美形不足により若干壊れてます。あらー。
いやね、登場人物は魔王様を除いて皆、……おっといけない。ネタ
バレするところだった。

地理の勉強は魔王様へ頭痛をぶれぜんとした模様です（前書き）

今回は前半説明です。

後半からコメディー入ってます。

不完全燃焼。

ゴミの分別大事。絶対。…あれ？

地理の勉強は魔王様へ頭痛をぶれぜんとした模様です

今日も今日とて、数冊の本を確保し私は机に向かっています。何をしているのかというと、この世界についてのお勉強です。

本来なら私は執務をしなければならないんだけど、この世界にきて日が浅いので宰相とかが筆頭となって『魔王代理』としてこなしてくれています。すごく申し訳ないから、はやくこの世界を理解できるように頑張ろうと思ったのが、この勉強タイム……自学自習です。

魔王というものは『世界を理解する』ことを、強制的にやってはいけないみたい。『強制的』っていうのは、誰かが魔王に教師役となって付きっ切りで教えること。もちろん、『頼む』という形ならOKなんだけど、なるべく自主的に学ぶことが大切なんだって。

人に言われてやる、ていうのは国民に失礼だし、人の上に立つ者の態度でもない。それに人に教わるってことは、教える側の思想をもとに治世するってことになる。もしその人の考えが偏見じみている、ある角度からしか物事を判断できなかつたら、国が滅ぶきっかけになってしまう。

その手のことが過去何回もあったから、それを防ぐために多少大変でも、色々な角度から自己で学ぶ　　というのがこの国の魔王になる者が辿る過程。

それは確かに正論なんだけど、私はこの世界に来て日が浅いので特例として教師役がいるの。一応、これらの考えのもと知識や思想が偏らないように数人で、っていう形をとってます。

ゼロから全てを教えてもらうのではなく、予習をしてから授業をす

るっていうスタイルをとっているの、一応自学自習と判断されているみたい。

でもね、はつきり言って私が魔王になったのは不可抗力なの。なりたくてなったわけでもないのに、真面目に魔王として学んでいるっておかしいよね。

……と言いたいんだけど、それには理由がある。私の選択は、損得勘定でいっただけ損だけど許容できる範囲の損だから、今の地位にいるのが私の現状。

確かに就任は脅されたりもしたけど、彼らの話を詳しく聞くとそれは仕方がないかなと思える。なにより私を含めた多くの生命の危機ってことも含めると、ならざるを得ないっていうか……。

まあ、そんなこんなで魔王就任を了承したのです。詳しい説明は、今度でも。

そして私が自主勉強していると、訪問者が訪れました。

「ハリー魔王様、ご機嫌いかが？」

「あれ、アリーちゃん？」

初めてアリーちゃんに会ったときは思わず固まってしまった私だが、今となっては普通に対応できます。

余談だが、その時にアリーちゃんの息をのむほどの美しさで固まったと思っただけらしい。

いやいやいや、食われると思って固まったんですけどね?!

ちなみにとても『姐さん』と呼びたくなるお姉様キャラです。この方に逆らったら明日は拝めなくなると、信憑性の高い噂であります。キヤー素敵。こんなお姉様に痺れます。

アリーちゃんも城で働いてるんだけど、ちょっと特殊です。

女性でかなりの実力者だから国の部隊長の一人で、今は王直属の護衛の一人でもあります。私が女なので、一人でも同性がいると安心できる、って意味も含まれてるみたい。

そんなわけでアリーちゃんと交流することが増え、甘いもの好き同士っていうこともあり、仲は良好です。

「あら、今日は地理について？」

「うん」

今日の範囲は地理。

この世界には大陸が6つあって、それぞれの大陸に大まかな種族でわかれて住んでいます。

世界地図には、魔族が住んでいる大陸（ナーダミシャス大陸 魔大陸ともいう）が中心となつて、魔大陸を囲むように四隅に人族の住んでいる大陸が配置されてます。

人族と魔族はお互い不干渉のスタンスをとつて、一切交流がないんだって。交流があるから、争いが生まれる……と判断した昔の人族と魔族の王様たちが条約を結んだみたい。

それで魔大陸には国が五つあって、我が国は『月竜国』と呼ばれています。

ほかに『炎竜国』『水竜国』『土竜国』『樹竜国』があります。

何故国名に『竜』がついているのかというと、「強そう」だからだそう。そんな理由かよ、とツツコミを入れたのはよく覚えてます。

確かにすべての国に竜族が住んでいるけど、他の種族と比べて数が少ない。もともと出産率が悪いというのもあるけど、誘拐（召喚）されて数が少なくなっているのも理由の一つみたい。

ほうっっておけばその内帰ってくるから、特に騒いでなかった竜族だけど、ついこの間「卵」まで浚われたんだって。流石にやりすぎというか、限度を知らないことに竜族の方々はかなりご立腹したようで、皆さんでもものすごい防御魔法をかけてました。多分これで竜族の人口（竜口？）が減ることは無くなりそうです。まあ、国として働き手が少なくなるのを防げたのでこちらとしても利点です。わー。ぱちぱち。

炎竜国は良い武器の名産地。それに伴い、武術も発展してます。

水竜国では魔術が発展してるの。だから魔法を伴う医術が 발전してるかな。

土竜国は鉱石や魔石がよく採掘されています。だから、装飾品とか手工業が發展してます。

樹竜国は国土の8割が森なの。だから森とうまく付き合える種族（エルフ・妖精とか）が多く住んです。薬の医学が發展してます。最後に、我が国『月竜国』では、占星術が有名。貴重な蔵書とかある図書館とかあるから、学者が多く訪れる国です。あと、うちでも魔石が採れます。土国よりは産出量は少ないけど、質が高いから

結構好評みたい。

ここまでが今日の勉強の範囲。

「ねえアリーちゃん、何でうちの代表的な名物は占星術なの？普通、図書館じゃないの？」

普通、貴重な蔵書とかあつて学者が沢山来るところなら、図書館を名物にするはずだ。しかし、この国では何故か占いを名物にしている。それも占星術だ。

確かに、この国の夜は晴れていることが多い。しかし毎日晴れているわけでもないの、星を使った占いが必ず出来るものでもない。占星術のみを推しているのが不思議だった私は、アリーちゃんに質問する。

「何でって…月竜の特性だからよ」

「は？」

尻尾をくるりと器用に回し、アリーちゃんは私の問いに答える。

「月竜は占いが得意なの。昔に月竜から占いのやり方を教えてもらったから、我が国ではそれを前面に推してるの。それで、占星術は月竜以外でも簡単に占えるから、これが一番有名な理由。」

「え、ちょっと待って。『月竜』？」

「ええ。我が国は『月竜国』と呼ばれてるのは、それが一番の理由。

実は正式な国名は『月竜国』じゃないのよね。昔のある時代の魔王様が月竜ファン？ いや、占星術に感激したんだっけ。そんな感じで国名を変えちゃったの。」

他の国もそんなノリで国名を変えちゃったのよね。あはは

なんだそのぶっちゃけ話。

え、皆さんそんなノリでいいの？

「あ、反対意見とかは全く出なかったそうなのよ。」

あ、そうですか。

……。

……。

……さあ、勉強会に行くかー。

無言になって支度を始めた私に、鎌首をもたげて不思議そうに尻尾

をくねくねさせるアリーちゃんが出た。

地理の勉強は魔王様へ頭痛をぶれぜんとした模様です（後書き）

説明ばかりです。

テディがいなきゃいじりキャラがいなくてつまらん！

く魔王様の日記く

○月 日

アリーちゃんが薄桃色になってました。

シヨッキングピンクよりも似合っていたと思います。

ナデイが、いろんな女性に熱い視線を送られていることに気付いた。
もちろん男性にもだった。

…あれは、妬みだと思う。もてるんだな！

ペットができた。

名前をポチにしようとしたらすごく嫌がられた。

良い名前はないかな？

多分次は、ペット登場します！

魔王様と部下ナディアス（前書き）

お久しぶりです。

不完全燃焼です。予定と違う話を投下します

魔王様と部下ナディアス

最近気付いたことがある。

それは、ナディはモテるということ

ナディアス「キーファは若くして宰相の役についている。いわゆる、エリート街道を突っ走っている男だ。

人心も厚く、穏やかな物腰の銀髪碧眼の美青年といった、内も外も完璧な男　さらに付け加えると、現在は女の影が全くなく、フリ！。

てなわけで、婚礼期真っ最中のお姉様方からの最優良物件のうちの一つである。

つまり彼は、女性をより取り見取りできるってこと。

「…なびく銀系の髪は柔らかに、澄んだ冬の空を思わせる青い瞳に映されれば、皆恋に落ちる。低めの声は艶やかに、聞くものの耳を奪う……その姿は傾国の美男子　」

「彼を射止めんとする乙女は数知れず、大陸の端から端までの国の美女までもが彼の姿を一目見ようと月竜国へ押しかける」

「……………魔王様、私のことが嫌いなのですか？」

「いやー？」

市井に出回っているナディの人物像を読み上げてるだけだよー…にしてもモテるわね」

なう、ナディと対談中。

本日の予定は特に何もなかったため、前々から部下たちに聞き及んでいたナディの噂を本人に伝えることにした。特に意味はないわけではない！

「私は魔王様一筋です！」

「はいはい、お仕事ご苦労様。

っていうかさ、ナディがそういうことを言うから私が女の子達に睨まれとるのよ。」

ナディは、よく私に好意の言葉を言ってくれる。

いやはや、仕事熱心というか真面目というか…人間、部下に慕われると仕事を頑張りたくなるよね

そういうことを知ってるとは、ナディは侮れん…

「それはすみません。しかし私は嘘をつけない性分で」

「で、さー、なんで私にはナディの人verが見えないのよー！」

「魔王様ってたまに私の話を聞いてくださりませんよね。」

そしてそれは魔王様の目のせいです」

「何で私には『真実の瞳』なんてオプションがついてるの?! いないよ!」

「なきや、私のここでの生活はパラダイスだったのに……! 美形に囲まれた生活なんて、異世界トリップの醍醐味なのに……!」

「『いせかいとりつぶ』とは判りませんが、その眼は魔王様にとってかなり有益なものですよ。
幾度となく助けられたでしょう?」

「そうだけどさー……」

私の眼は、『真実の瞳』とかいう異世界使用となっている。

これは、相手の種族とかを一目見ただけで判るようになって、
尚且つ相手の特性とかも知ることができるレアな体質。基本的に先
天性の場合が多いんだけど、時として後天的に出現することもある
そうな。

真実の瞳にはランクがあって、

- ・ 1 … 相手の種族を知る（気力を使う）
- ・ 2 … 1 + 相手の特性
- ・ 3 … 意識せずとも相手の種族を知れる
- ・ 4 … 3 + トラップすべて目で見て回避

の、おおよそ四段階。

ちなみに私のランクは四…しかもそのなかでも上位で、意識せずとも視界はいつも人外様方です
でもトラップ回避はかなりありがたい。

トラップは、毒とか身体異常をもたらすものも含まれてるから、私の体に有毒なものを知れるし。（実は何度か助けられたことがある）

ぐうのねも出ない私の反応に苦笑した雰囲気のスライム。スライムだから表情とかわからないから、体表の色で判断。ちなみに苦笑はうつすら黄色。

私にはナデイがスライムにしか見えないが、本当ならナデイは凄く美形。……さっき言った？それはごめん。鏡に映した姿ですら人型ではないから、もう人型を見るのはあきらめた。

真実の眼を持っても、普通は鏡に映った姿までは本当の姿で映らないけど、私の眼は特別仕様で『いついかなる時でも相手の本当の姿が見える』らしい。これは前代未聞だから、私のランクはそのうち指定されるかもってクマが言ってた。

人型を見れないなんて残念、と内心悔しがりながら頼杖を突きつつ、今度は私情に満ち溢れているverのナデイの噂を本人の前で口にしてみる。

「『エリザベスちゃんもリスティーナちゃんも、あの男が奪ってっただんだ！ここの年の娘は殆どアヤツに骨抜きさ。……俺にも一人くらいよこせてんだ』」

「魔王様？」

「『ナディアス様？あー、確か今はバーバラさんと付き合ってるんじゃないかったっけ？顔が良いからかわからないけど、結構女をとつかえひつかえに手を出してるみたいよ。年頃の娘さんは皆気を付けたほうがいいわ。あ、間違えた。バーバラさんじゃなくてマリアーナちゃんだったわ。……え、今はクルミアータさんと？！どんだけ女好きなのよ……いえ、女からよってくるんだっけ？』」

「魔王様　?! 信じてませんよね?! そんな噂なんて信じてませんよね?!」

「市場調査の一部ですが何か」

「どや顔されても悪意しか感じられません!」

「市場には私情に満ちた噂とかあるよね」

「洒落ですか。」

「まあ、なににせよナディ」女好きっていうのが定評らしいよこの女たらしめ。……でも、相手に無理強いしたらダメだよ」

「違いますから。私には魔王様だけですから」

「認めたほうが楽だよ。女たらしだって。」

…… 大丈夫。酒池肉林にしない限り私は目を瞑っておくから」

「本当に魔王様は私の話を聞いてくださりませんよね!」

その日はナディは話しかけても無視されました。

私は部下に寛大だと思うんだが、この世界では酒池肉林がデフォルトなのかしら?

そしたら禁欲させてるってことよね……でも酒池肉林で大金がかかりそうだし。

金のかからない酒池肉林。

そんなうまいことあるわけ……ああ、幻術で酒池肉林にご案内！とかいいんじゃないか。

我が国の観光を担う者たちに提案してみようか。

その後聞いてみたら幻術での酒池肉林は、他の国ですでにやってるそうです。残念。

魔王様と部下ナディアス（後書き）

ペットでなかった！

次はペットもしくはデディ＝ベアがくるかもしれないとか呟いてみる

魔王様とクマい部下（前書き）

早めに投稿できました。

いつもggggですみません…

魔王様とクマイ部下

テディⅡベアは武官もとい騎士である。

そんな彼は現魔王の護衛の一人という地位にいる者であるが、気さくで面倒見の良さから市井の老若男女に好かれている。

外見良し、中身良しの、そろそろ將軍に昇進するかもしれないという噂でもちきりの、将来有望株である。

ゆえに彼もナディアス同様、年頃の娘さんたちから人気である。

……………さらに彼は男性にも大人気である。

いわゆる、『兄貴』と呼びたい魔族ランキングでtop5に入る強者だ。

ナディアスとは対照的に、男性に好意的な目で見られるのは人徳…魔族徳…クマ徳の差だろうか。

たまに違う意味で「お慕いしてます！」な輩もいるが、おおむねそんな感じで人気者。

「もふもふなのに…」

「開口一番それが」

前者は私のセリフ。

皆様こんにちは。魔王です。

本日は皆のアイドル テディⅡベアさんと会話しています。

体表は銀色の毛。
つぶらな瞳は紺色。

そんなラブリーな姿がクマです。

ええ、黙って椅子に腰かけていれば淒く可愛い子ですよ。テディベアブランドを持っているどこそのぬいぐるみのように。

しかし、当部下は喋らせると淒く残念な仕様になっております。そこがよいと仰ってくれる方、是非その魅力の説明プリーズ。

「そついやさ、クマって何族？

ナディはスライムで、アリーちゃんはバジリスクなのは聞いたことがあるけど」

「……黙秘権を」

「却下。」

おいこら舌打ち聞こえてんぞ。

「プリチーなぬいぐるみから不穏な舌打ちって、お子様には聞かせられないですよー」

「その前に俺はぬいぐるみじゃないし、アンタ以外には人型に見えるんだが」

「ほんと、可愛くない。見た目だけか可愛いのは。」

……あのさ、クマって最初のころと態度が違くない？私のこと『ア

ンタ』なんて言わなかったよね」

「つーかな、お前だけだぞ。俺のこと『可愛い』なんて形容するのは。」

態度は相手によって柔軟に変化させているだけだ。」

「つまり親しみのもてる魔王ってことですね」

「ポジティブで結構だと思います」

「貶された?!」

タメ口から急に丁寧語にされると結構傷つくよねー。

少々ハートブロークンしながらクマを観察する私。

愛らしいぬいぐるみフェイスから漏れる、色気ある溜息（色男ve
r）が可愛さと妖艶さを醸し出す。
くそう、抱きしめたいじゃないか。

「で、最初の質問に戻るけど、クマの種族は？」

「忘れてなかったか……」

先ほどよりも格段に大きなため息をつく部下。

私ってかなり寛大な上司じゃないか？

そんな感じで数分ぐだぐだしつつ、クマに教えろとせつつく。
あまりにしつこい私に諦めたのか、重い口を開く部下デディ。

「……………です」

「え？聞こえない」

「だから、ヌイグルミー族です！」

「……………ぶはっ」

「だから言いたくなかったんだ！」

「アンタ会ったびに俺のこと『ぬいぐるみ』『ぬいぐるみ』言いやが
って！」

「いや、私のいた世界では『ぬいぐるみ』ってあつたし」

「ニヤピンなのがさらに腹立つんだよ！」

「完全に八つ当たりじゃん！」

「悪いか！」

「魔王に八つ当たりする魔族があるか！
ていうか私のせいじゃないよねソレ」

「数代前の魔王が俺らの一族を改名しやがつたんだよ。
だから魔王に八つ当たりしてもかまわないんだ」

「元は何だったのさ」

「ヌイ族」

「グルーミーついただけじゃん！
グルーミーどっからきた？！」

「ヌイ族出身の正妃の名前。」

「……………寵愛深かったんだね」

「……………ああ。」

対談しましょ

魔王（以下・魔）

テディ＝ベア（以下・テ）

魔「それでは質問たーいむ！」

テ「いきなりどうした」

魔「ここではテディ＝ベアさんに質問しちゃう という企画を行います。」

テ「無視？」

魔「質問は部下の皆さんからいただきましたー。ご協力ありがとうございます！」

テ「そしていつの間にマイクやらカメラやらがセットされてるんだよ」

魔「ノリが悪いですよー。ちなみにこれは放送局の方々の協力によりこの企画が成り立ってますので。

……にしてもテディ人気者だねー」

テ「人気かはわからないが、俺に質問なんて需要があるのか？」

魔「あるからこんなことしてるんだよ。全部本音で語ってね。これは魔王命令でもあります。」

えーっと、まずお名前をお願いします」

テ「テディⅡベアⅡストラトスⅡティファニアだ」

魔「……名前違うかい？」

テ「いつもは省略してるんだ。

……そういえば軍の登録も省略名だったな」

魔「おつと衝撃の新事実ですね。

こんなところでぶっちゃけないでください。

まあいいや『今お付き合ってる人はいますか？』」

テ「恋人のことか？いないな。

今は仕事に打ち込みたいからというのがあるし、この職業はいつ死ぬかもわからないから、相手に余計な心配をかけたくないってことも大きいかな。」

魔「いろいろ考えてるのね

似たような質問なんだけど『好きな人はいますか？』」

テ「いな…あー、目が離せないやつはいる、かな。

それが恋愛感情かはわからないが……」

魔「おつと年頃の御嬢さんたち、聞き逃せない発言がありましたねー
じゃあ次の質問。『ディーベアさんの好きなタイプは？あと、
性別とか種族とか越えられる愛はあると思いますか？』」

テ「何か濃い質問が来たな？！

好きなタイプ…うーん、やるときはやる子、かな？あと俺のことを許容してくれる子とか、目の離せないけど、変なところでしっかりしてるやつとか

後半の質問は………黙秘権を…え、無理？うーん………人それぞれだけだと思う。」

魔「なんだか世話好きなクマらしい回答だね。

……長くなっちゃったんで、そろそろ終わりましたよかね。
それでは皆さん、機会があればまたお会いしましょう！」

テ「聞いてくれてありがとうございます？」

魔「そこ疑問形なんだね。」

魔テ「「それではさよなら！」」

魔王様とクマい部下（後書き）

つぎこそペットが出ます！

テディの本名が明らかになりましたねw

魔王様、ペット（仮）を拾う（前書き）

お久しぶりです。

予定通り、ペットとの初対面をどうぞー

魔王様、ペット（仮）を拾う

「……………」

「……………」

「……………」

どうも、魔王こと悠です。

現在ある方と、とても熱い視線を交わしてます。

視線なんて逸らせません。

その相手の殿方はとても素敵な方です。

その方は、

全体的に細身ながら綺麗に筋肉の付いた、無駄のない肢体。

紫色の切れ長な瞳。

夜空を思わせる、すべてを包み込むような闇色の……毛皮。

はい、『人外』の殿方です。

雰囲気的に怜悯な感じなので多分 でしょう。

そんな彼は見るからに美獣さんです。

尻尾とかふさふさしてて是非ブラッシングをして差し上げたい。

そんな私ですが、只今猛烈にあせてます。

理由としては、その……目の前にいる獣さんです。

先ほど『視線を逸らせない』と言った理由なんです、彼の口から除く素敵犬歯の鋭利なこと。多分視線を逸らしたら喉元をやられる気がしてならないので逸らせません。

相手が美獣でも、命には代えられません。

それに私は動物が苦手なので。

あれだ。見る派ってやつだ。

で、若干固まりながら目を逸らさないでいる私なんですけど、なんというか

美獣さんも目を逸らさない

ってなんなんだろう。

あ、今更ながら美獣さんの外見説明ですが……

黒豹と獅子を足して二で割った感じです。

判りにくい？

うーん……黒豹を更に美形にして威圧感を増したのがこの美獣さん。

「ガルルルル……」

「うをう」

唸られました。

迫力満点のその姿に、思わず体を引く。

……………おい、そこでなぜ一歩踏み出す。

ためしにまた一步下がる……と、踏み出す黒いの。

何でだちよつと怖いじゃねえか、と心の中で呟きつつも目は逸らさず、少しずつ下がる。

そうして壁際まで追い詰められ……るような可愛らしい神経を私がしているわけがなく、あえて逆にこつちが一步踏み出してみる。しかし向こうは下がらず、逆に距離が縮まる。えー…。

まあ、人生には意外性が必要だよな、とか現実逃避をしてみたり。

「君は魔族なのかな、それとも魔獣なのかな？」

「ガウッ」

「私の目には魔獣にしか映らないので、魔獣ってことで……訂正があるなら二度鳴いて。」

「グルルルル……」

「つまり当たらずとも遠からず、ってことかな？」

基本的に、異世界使用となった私の体は魔族の言葉を聞いたり話したりすることができる。

公用語はもちろん、古代語なんかも翻訳されてるらしい。

しかし、『魔獣の言葉』や『破廉恥な言葉』は翻訳されないという。一応未成年である私には教育上ちょうど良いらしい。

「…っというか君ひとり？」

目の前の黒豹に気を取られて後ろからガブリは嫌だ。
今更だが、魔獣は基本的に意思疎通ができる。

会話を交わせるのは少ないが、ボディランゲージ　　頷くとか、手足を振り回すとかで意思疎通をするという。

が、

意思疎通すらしてくれない、この猫科の魔獣に懲りなく再び声をかける私って健気。

じっと見つめるとプイツと顔を逸らし、長い尻尾をべしべしと地面に叩き付ける。

……………何だこいつ可愛いじゃないか。

猫が尻尾をピシピシしてるのって、たまらん可愛さがあると思わないか。

猫好きならたまらん仕草だろう！

「お持ち帰りしていい？」

真顔ででっかい猫に話しかける魔王。って今更だが、かなりシュールな気がしてならない。

返答なしに猫を伴い、城に帰還する私。

どうやったか？

それはご都合主義の魔王の力というものですよお嬢さん！…失礼、

旦那様もでしたね。

ハイテンションの私をドン引きしながら迎え入れてくれた魔王城の皆さん、ありがとう。

「アンタ何引き連れてきてんだ?!」

「やほーデディ。これ飼いたい」

「『飼いたい』って魔王様、そちらの方は『飼う』レベルじゃないですよ?!」

「ナデイ、私思うんだ。

……一城に一匹猫が必要だって。

魔界って猫アレルギーとかある?」

「それはないが……『猫』?」

「うん。名前は『レオン』にしようと思う。いい?」

「ガウッ」

猫・レオン（仮）は我関せずといった風情で私の足元に寝そべっていた。尻尾は緩やかに揺れている。

勝手に連れてきてしまったが、特に怒っていないみたいだ。むしろ城の環境に怖気づくことなく寛いでいる。

…君は将来大物になるよ。

「本人嫌がっていないみたいだし、決定ってことで」

[illegible]

その数日後、月竜国の魔王は変人という噂が流れることとなった。しかし後悔はしていない！

大きな猫（？）に埋もれている魔王の姿が見られることとなったせいで、さらに変人のランクが上がったとか私は断じて認めない。

魔王様、ペット（仮）を拾う（後書き）

お気に入りしてくださった方、本当にありがとうございます！
次も新キャラが増えそうです

魔王様、もの扱いされる（前書き）

今回のはいまいちです…

魔王様、もの扱いされる

「おいそこのお前、僕のモノにしてやる！」

こんにちは、あなたの魔王です。

現在クソガ…げぶん、お子様に絡まれています。

子どもと話すときは視線を同じにしましょう

本日は特に予定もなかったので折角だから城下の様子でも見ようと、一人で身分を隠して行動です。

ナデイに後で泣かれようがクマに殴られようがアリーちゃんにビンタされようが私は行くんだ！

我が月竜国でも観光客目当てな商品とかが置いてあるので、ウィンドウショウアップिंगだけでも楽しい。

そんな感じでアクセサリーだとか光物・食べ物をメインに見て回ってたら、ガシツと右手を捕まれる。

これは見つかったかなー、と部下たちが与えてくれるお仕置きコースを何パターンか思い出す。

あの魔族のお仕置きだけは止めてほしいとか希望的観測。

しゃーない、自分の行動は自分で責任を持ちましょう、甘んじてお仕置きを受けるぜと、半ば漢らしく腹をくくりながら後ろをゆっくりと振り向く。ヘタレ言うな。

すると……見たことのない半獣くん。
鳥っぽい人間ていうのかな、二足歩行してる鳥人間ってかんじ。
金色に近い毛で、背の大きさから多分少年くらいの年だと思う。
勿論、背に翼が生えています。ぴよぴよ動く姿は触りたくなる誘惑
にかられる。
ちなみに鷹だと思う。

こんな子知り合いにいたっけな、と思って少年を見つめると……
冒頭のセリフを浴びせられました。

てなわけで、変なお子様に絡まれております。

これは日頃の行いの賜物ですかね。
クマの首に、瞳の色に映える青いリボンを結んだからかな……。
それとも、ナディ宛に幻術・酒池肉林コースのパンフレットを送っ
たからかな……。

……全部グッジョブじゃないか、私の行動。

「……どこらへんが君の御眼鏡にかなったの？」

多分この少年はいいとこのお坊ちゃまなんだろう。
でなければ、初対面の人間に『貴様を飼ってやる』なんて言わない
はずだ。

下手な対応をすると、後々面倒くさくなるはずだ。
……あれ？私って何の職業についてたっけ？

「その凡庸な顔立ち・背景に溶け込む平凡な雰囲気は僕の心をくすぐるんだ」

「おいゴラ貴様ケンカ売ってんのか」

すぱーん、と少年の頭を叩いた。

数秒前の決心どこ行っただとか聞かないで。

……私、魔王。うん、きっと大丈夫。

黄金の右手（古い？）をびっくりした表情で見つめる鳥少年。

「な、主に手を挙げるなんて……！」

「誰が主だ馬鹿者」

誰だこのガキを教育したのは。

とか考えていたら、背後から叫ばれた。

「坊ちやま

！……！！……！！」

やめて鼓膜に優しくして！

大音量での突進に、眼前の鷹少年は両耳をふさぎながらその声の主をうつとうしそうに見やる。お前の知り合いか。

そいつは少年に勢いよく突進し、むぎゅうつうつうつ……と抱きしめた。

「じい、煩い暑い痛い」

「じいは心配いたしましたぞー！ー！」

ヤギでした。

誰がつて？

それはもちろん『じい』です。

帰りたい

帰っていいかな？

お腹すいたからもう帰りたい。レオンをもふもふしたい。

若干現実逃避をしてたら、主従コンビは二人で話し始めた。

「坊ちやま、この者は？」

「新しい僕だ」

「おい、頭が高いぞ。坊ちやまに拾われたことを光栄に思え」

「誰が僕だ。誰も許可してないけど

っていうかあんた世話係なんだからそのクソガキから目を離してんじゃないよ」

「お前、坊ちやまになんて口のきき方を！ー！」

「知るかヤギ。

さよなら二度と会いませんから」

レオンに癒されよう。

尻尾を触らしてもらおう。

「待て！」

呼び止めるな童よ。

我は欲望に付き従うのだ！

「主を置いてどこへ行く！」

ブツンしたのでシカトして帰った私は悪くないと思う。

その日、ペットから離れない魔王様がいたという。

魔王様、もの扱いされる（後書き）

多分その内、後日談をさせていただこうと思います。

「月竜国の魔王様のご機嫌も麗しゅう……あれ？」
「あの時の僕?!」

みたいな。

魔王様、勇者になる？（前書き）

今回もあまり間隔を開けずに出せてよかったです。

魔王様、勇者になる？

「勇者様、どうか我らの世界をお救いください……！！！」

いや私、魔王ですから。

初っ端からツッコミ満載ですみません。
ジョブチェンジしそうになってる魔王です。

『何が起きた』

この一言に尽きます。
事態は数刻前に遡ります。

こんにちは異世界。……異世界？

会議中に足元から魔方陣が現れて気づいたらこの場所に居ました、
以上。

説明になってない？

大丈夫。私も説明ができるほど状況確認ができてない！

だって考えても見てくれ。

『会議中』だよ。

何者も邪魔できぬように厳戒態勢を　　つまり私とか国の重要人物に対する警護をしていたにも関わらず異世界召喚とは、これ如何。しかも魔王召喚とかなんだ。おい、どこのサバトだ。

召喚特有の視界妨害で視界が真っ白に染まり、晴れた。

ぐるりと見渡すと

ワイワイこいつあまたどっかの魔界か

こん畜生。

やっぱり人間はいませんでした

うん、わかった。でもね、期待してもいいだろう？

そして……

「勇者様………術式は成功したぞー！」

……勇者？

状況確認のために相手の話を口を挟まず聞いてみると、この国は今、世界規模の脅威が襲ってるらしい。

それを回避するために勇者　　つまり私を呼んだという。
これはあれか。

私は異世界召喚の『魔王』と『勇者』ルートをコンプしたことになるのか。もしかして異世界召喚のすべてのルートをコンプする運命にあるのか？マジでかふざけんな。

で、脅威は何かというところ……闇を好み、他の種族を厭う存在だ
そうです。

「凡庸な娘、貴様はとにかく我らに力をかせ」

兎な巫女姫が一段高い椅子の上から頼づえをついて頼み込む。

……兎って、もつところ　癒し系じゃなかったっけ？
どうしてかな、殴りたくなるんだけど

その姿に冷や汗を流しているのは、多分神官長だと思わせる狸。

（マジ誰かこの女どうにかして！人にものを頼むって姿勢を誰か教
えてやって！）

こんな心の叫びが聞こえてきそうだ。

この手のためきって、もつところ　狡猾なんじゃないか。
利権にむさぼるっていうかさ。

あの兎、こつちが断るなんて思っていないみたいだ。

まあ、断られたら脅せば済むと思ってるんだろ？なあ……つかこの剣
先を四方八方から向けられた状況で断る奴なんて普通はいない、ね。

あいわかった。

「遠慮します」

あえて断ろう！

「衛兵、斬れ「斬って良いの？」…なに？」

兵士の動きが止まる。

兎は私の言葉にかかった。

「貴方たちは、私がここに誘拐されてきたのを『成功した』と言った。

それはつまりこの誘拐が成功する見込みが薄いこと。その成功例をみすみす殺してもいいのか聞いているのだけど」

狸が兵士たちに目をやり、刃物を私から遠ざける。

狸は曲がりなりにもかなり位の高い者のようだ。兎とどっちが高位なのかわからない。私の疑問を知らず、兎は続ける。

「面白いことを言うが、それなら貴様を斬った後また召喚すればいいだけだ」

「じゃあ何故その者が兵士を下がらせた。

つまり、私の言ってることが正しいのだろう？」

狸は数度口を開閉させる。それは金魚の呼吸によく似ていた。きつと、「しまった」とでも思っているのだろう。

しかし兎は口角を上げ、続ける。

「ならば、成功するまで続ければよいだろう?」

くすり、くすり。

尻尾が蛇の兎は嗤う。

お前は逃げられないのだよ、と。

尾の蛇も、どこか嘲笑っているかのようにうねうねと蠢く。

良い性格してるじゃない。

流石、支配者として君臨しているとそこらの奴とは違うね。

でも、

「それをする時間と労力はあるの?」

これくらい気づいてるんだよ。

異世界召喚なんて不確かなものに頼るってことは、それほど状況が切迫してるってこと。

新たに誘拐する暇はないだろうし、時間があるのであれば限界までそれに力を入れるのであれば国の防衛に力を割くのが当たり前だ。地盤（国防）が悪ければ勝てる戦も勝てない。

というのが、私の考え。

残念だったね。相手が私でなければ、ほとんどの者が従ってたんじゃないかな?

まあ、カマをかけてみたけど乗り切れてよかった。

そうして、

「我ら人が、魔王なぞに勝てるはずがないだろう！」

「は？人？」

「何を言っておる。人に敵対するものを纏める異形の者は『魔王』と呼ばれるにきまっておろう」

「魔王？え、ここってどこよ。何族がいるのよ。」

なんだか、誤解があるようだ。

彼らに話を詳しく聞いてみると、ここは人間の国だった。

じゃあなぜ私の眼には人間に見えないかというと、憶測だがこの『眼』のせいだろう。

ここでも私の美形ウォッチングの野望は潰えるのか……………！！

魔王様、勇者になる？（後書き）

これは一応、続きます。

個人的に魔王が勇者の役目を果たしたら面白いなと思いついて。

ちなみに狸ですが、そのうち番外編でこいつを主人公にして書こうかなあと思うてみたり。

魔王様ちよいす勇者の武器（前書き）

ちよつと頑張りました

魔王様ちよいす勇者の武器

こんにちは、魔王です。

乾いた笑いが止まりません。

初期装備は、聖剣ではありません

結局あの後、お城の玉座に無理やり連れて行かれました。

薄らハゲてでっぷり太った鷹みたいな王様の前で跪かされそうになったり、それに鼻で笑ったら牢屋に連れて行かれそうになったり、官僚たちからの値踏みする視線を集中砲火されたりと散々だった。

とりあえず言いたいのは、王様もつたいない。

ちなみに王子っぽいのもいたけど、彼は亀だった。

何で鳥類から爬虫類が生まれるんだ。

……………本質の違いか。

今更であるが、この世界においては相手の本質がその者の姿をかたどって私の脳に映像を送っているらしい。実に面倒な機能である。

ちなみに話によると、王子様はリアル王子フェイスで超美形らしい。

これはメイドさん情報なのでかなり信憑性がある。

彼女らによると城にいる人間で王子レベルの美形はもう一人いて、彼は騎士団長を務めるほどの腕前だそう。

うつきつきしながらその姿を探すと、……………鷹でした。

まじか王様と同族かよ、と思ってたら、これまたメイドさん情報で鷹騎士さんも王族の血をひいているそう。先代の王様の孫みた

いで、現王様とは従兄弟の関係にあたるらしい。つまりこの国は世襲制で、国王の位が息子飛ばして孫にいったんだなあ。

で、

「さあ、この中から武器を選ぶのじゃ！」

バニー巫女がハイテンションで私に言う。

え、何このテンプレ。異世界召喚らしくて涙が出てくるよ。これで会う人が皆人型だったら言うことないよ、私。

ちなみに状況説明ですが、只今宝物庫・勇者専用とかいう部屋に連れていかれました。

っていうか、普通勇者の武器って剣じゃないの？もしかして最近では複数の誘拐が流行っているの？そして皆その役目を押し付けられてるの？

もうさ、召喚術なんて封印しちゃえばいいんじゃないかな。

と、個人的感情は置いておいて、

宝物庫の中には七本の武器があった。

赤青緑茶白黒……と、包帯巻き。

なんか一つおかしいのじゃないか？！

「なにあれ。ねえ、武器に包帯とかおかしくない？！せめて封印とかのせいでお札とかだよな？！」

「あれは特別で、勇者の武器には含まれとりませんぞ」

狸が私の叫びに答える。いたのか貴様。

え、武器じゃないのあれ。なら何でここにあるんだ。

「諸事情というやつです」

「御託は良いからとつと選べ……………ああ、武器に選ばれなきゃ使えんからの」

「それ、選べじゃないよね。選ばれろだよね」

「基本的に勇者というものは複数の武器に好かれるからの。選ぶことに変わりはない」

で、

「ねえ、全敗なんだけど。」

おい兎、複数に好かれるんだよね。何これ。全部が私に拒否反応とかおかしいだろ。説明しろや」

「『基本的に』と我は言っただぞ。」

というより、我は初めて見たぞ。ここまで拒否される奴は」

焦げたり水浸しになったり、壁に亀裂が入ったりともはや部屋の機能を果たしていない惨状が目の前に広がっていた。

まさか私が魔王ポジションにいるから、奴らは嫌がってんのか？！

「巫女様、最終手段だが一応アレも試してみませんか？」

狸が兎に進言する。

兎はそれにフムと考え、ニヤリと笑った。怖いよ。

「よっし勇者よ、あの包帯も試してみろー！」

「いいけどさ、何でそんなに楽しそうなのか教えてくれない?！」

そんなこんなで包帯に手をかける。

「み、見えない……だ……と……ってあれ、見えんじゃん。さっきまでは何だったんだろ。…へー、綺麗な銀色のレイピアだね。持ち手が鱗みたいで面白いし。」

「、なん……だ……と……?！」

お互いが驚きの声を上げる。

「スケルトンを扱える奴がこの世にいるとは……それは、建国の際に尽力した巫女・アリー＝タータンリート様の愛剣であるのに……!」

なんというか、知り合いによく似た名前だなあ。

「ていうか、その剣は闇属性の中でも群を抜くほどの暗黒
凶
暴さを持つてるんだけど、お前本当に勇者か?！」

「少なくとも勇者と名乗った覚えはないね」

「つかそんな物騒な代物をここに放置するな。」

武器が決まりました。

知り合いの女性を髭髯させるようなレイピアです。『毒』と名のつく特殊効果があるそうです。

消毒もできるそうなので、いろいろと活躍しそうです。

とりあえず、どうでもいいですが早く帰りたいです。

魔王様ちよいす勇者の武器（後書き）

今回のタイトルは悩みました。

もうひとつは「魔王様、勇者見習いになる」です。

しかし何も勇者として訓練をしていないので却下しました。
さあ、訓練するかそのままごとうー魔王城か悩みますね…

お気に入りしてくださった方、ありがとうございます。
駄文ですが、精進いたします。

魔王様と若鷹さん（前書き）

今回は第三者視点を入れてみました。
書きやすかったです。

普段以上にぐっだぐだですが、頑張ったんです。私にはこれが限界です

魔王様と若鷹さん

「来るなバカーーーー！」

神様、私が何をしたというのです。

皆様ごきげんよう、そして走っている方、仲間だ。是非私と友達になろう！

只今全力疾走しております。

ラブロマンスを求めて

事態は数刻……いや、数日前に遡る。

故あって召喚という名の誘拐をされた私は、ここ数日特訓という名のシゴキを受けていた。

現代の日本で、しかもインドアな花の女子高生にする行為ではないと思うんだ。そりゃあ、異世界補正の男子であるならばまだ判る。

しかし、私は女子。

この世界は女性の扱いがなってないんじゃないかな。魔王云々のまえに、女性における権利拡大を進めればいいんじゃないかな。

とまあ何故現実逃避をしているかというと、

「勇者様、わきを締めてください！」
「むーりー！」

若鷹に切りかかられているからだよ。

ちなみに、王様と区別して騎士団長の彼のことは『若鷹』と形容することにした。

今では薄ら禿な王様だが、若いときの武勲を世界に轟かしていたそうだ。

残念なことに王子には、その武才は引き継がなかったそうで、どちらかと言えば若鷹のほうが若かりし頃の王様に似ているらしい。まあその代り、王子様は魔術と治政の才に恵まれているとか。

向かい合う鷹は、凜々しい。

今まで見てきた中で一番の美鷹ではなからうか。

でもね、私が見たいのは人型の美形なんだ。だからごめん、きみの造形に感嘆できないんだよ。どちらかというと母なる自然をたくましく生きるその姿にしか溜息は出ないんだ。

え、分かりづらい？

一言で纏めると、鷹の美醜は私得ではない。

どちらかというと、もっふりしたほうが私得だ。

でもなあ、この鷹すつごい美声なんだよ。ナディ並に腰に来るんだ。耳元でこの声に笑われてみる耳がご臨終すること請け負おう。声フエチでない私がこうなんだ。もう、歩く卑猥者なんじゃないかこの人。それほどまでの犯罪ヴォイス。

「逃げてばかりでは、魔王なんて倒せませんよ」

「倒すなんて一言も言っていないし、まず勇者と認めてないから！」

「往生際が悪いですよ…っ」と

若鷹が剣先を唸らせながら、私のがらんどつな胸を狙う。おい待て、女の子はお腹が大事なんだよ！

それをとっさに右に下がることにより躲す。あつぶな…

こ、この野郎、本気だな

美声だからって、何をやっても許されると思うなよ！

「えーい、その羽をむしり取ってやる！」

やられっぱなしは性に合わないし、そのばっさばっさしてる翼をもいでやる！

「……………上等だ、かかってこい」

そしたら何故か若鷹の空気が凍りついた。

別サイド視点

俺はジェームズ。しがな軍人の一人だ。
普段なら、我々軍人は団長からのシゴキ……げふん、愛の鞭をうけている。

しかし本日は勇者様と団長が打ち合っている。

この勇者様、魔王との最終決戦のために我々に協力してくださる、高貴なお方なのだから。

それにしても少し……いやかなり、どこにでもいそうな空気をまとった娘だ。

俺としては本当に勇者なのか信じられないが、巫女姫さまがそう仰るのでそうなのだろう。

団長の愛の鞭が数日減るだけで、俺にとってはすでに株が上がってるから何でもいいや。個人的に言わせてもらうと、勇者様ががんばれ。多分団長は殺しはしないと思う。

実は団長は『鬼』と呼ばれていて、練習中は初心者相手でも手加減しない。

勇者様本人は初心者だと言っていたので、我々騎士団員は多大な心配を寄せている。

それで、勇者様なんだが……あの絶対初心者じゃない！

団長からのプレッシャーを受けて動けるってところからおかしい。でも、動きはかなりたどたどしい。もしかして、普段は剣なんて使わないのだろうか。そのせいだろうか。

それよりも気になるのが、勇者様は本当に女のなのだろうか。おそこにはまっつったくと言っていいほど興味のない俺が、団長の顔には見惚れるんだ。その団長の視線を一身に浴びながらも平然と、かつしかめっ面してるなんて、本当に女か？

この手の年頃の娘なんて、団長を一目見ればクラリとし、ひと声聞けばクラリと倒れ、話しかけられた日には昇天するほどの浮かれっぷり。……少しは見惚れるよ！

俺ラブロマンス大好きなのに、そんな空気全くない。団長は勇者様に興味津々なのに、勇者様全くと云っていいほど『恋愛？ナイナイ（笑）』とか言ってる！

美形騎士に迫られる勇者（村娘）とか、俺の大好物なのに！姫君と騎士よりも大好物なのに！

そうしたら、

「羽をむしり取ってやる！」

勇者様がすごいこと言い出した。

我ら騎士団は、別名『雷鳥の爪』と呼ばれている。

故に、我らの軍服には翼が描かれている。

それをむしり取るということはつまり、『貴様は雷鳥の爪の団員にふさわしくない』or『私に服従しろ』と言われてるってことだ。勝ったほうが負けたほうを好きにできるってことだ。決闘的なあれ。どちらにしる、今を時めく騎士団長に言うセリフじゃない。

ちなみにこの決闘まがいなもの、代理もokである。たまに、どつかの貴族の娘が美形騎士を得ようとお抱えの騎士に『やりなさい！』と命令。実はお抱えの騎士は主人のことが恋愛感情として好きで、アレ何このカオスと言いたくなるような愛憎劇が見れる。この手の話は巷の乙女たちに愛読されていて、文庫版として販売されているから気になる方は是非どうぞ。

マジでこの二人ロマンスがない。最近の幼子ですら『わたしまーくん大好き！お嫁さんになってあげる（はあと）』とか言ってるの

何があつた？

ごめん語りたくない。他の奴に聞いてくれ。

もう俺、砂と血を吐けると思うんだ。

文章で読むロマンスと、実際に目にするロマンスって、大分異なってるんだね。よくわかった。理想をリアルに持ってきてはいけな
いんだね。

とりあえず、

あらゆる意味で勇者様頑張ってください。

我ら騎士団は両手の掌を合わせて応援しています。

魔王様と若鷹さん（後書き）

もっとうとう、「彼女欲しい」と叫ばしてみたかった。
ちよっと、書き足しました。

魔王様と恋する鬼と……亀王子（前書き）

ちよつと遅くなつてすみませんー

魔王様と恋する兎と……亀王子

テンプレってなんだろう。

こんばんは、テンプレと王道ってどう違うのかわからない魔王です。かつて皆さんと同じ地球にいた頃の友人ならばそこらへんを熱く語ってくれるのですが、生憎いません。

というか、ずいぶんのご無沙汰してます。あのころは毎日会っていたのですが。

彼女の言葉が未知の言語過ぎて、右から左に流していたせいでしょ。うか、知識が断片過ぎて何が何だかわかりません。元の世界に帰れたら、是非とも彼女にメールをさせて頂きたいと思います。

まあ、そんなこんなで異世界で過ごしています。
ちなみに私の考える王道は、

- ・ハーレム
- ・美形わんさか
- ・乙女ゲー攻略キャラ

です。

え、腹黒鬼畜敬語キャラ？オプションで眼鏡？
バッチコイだ。でも現実にはいてほしくないよね。

親しげ口調腹黒キャラ？オプション眼鏡？
ええええ…考えたことない。個人的には『鬼畜』あるほうが好きかも。

王道？そんなの捻くれた奴には物足りない！

若鷹と親交を深めた後、なぜか私は兎に呼び出された。

「おい、お前……アレか？」

「アレって何ぞ」

「ラキアス様とのことに決まっておるうが！」

「……………誰？」

「騎士団長！」

今日の収穫

若鷹（騎士団長）の名前はラキアス

「で、団長がどうしたって？」

「い、いや……その……おお主は今さっきまであの方と親しく話しておったろう？」

あの方は王族で、普通ならお前のような下賤の者は近寄れないんじゃない！・・・ただだから、もしそんな恋慕の情など抱いていたらふ不憫での、ゆえにお前はあの方をどう思っているか、き聞きたくての」

終始語尾を上げながらの発言である。

長い。

どもり過ぎ。

テンションが高い。

普通の兎ではない。

何が彼女をこうたらしめたのだろうか……

「……………ああ、恋か」

「黙れい！」

冗談だったのに、当たっていたらしい。

というか、ここにきて初めての恋バナ！私のテンションも上がるよ！

真っ白な毛を赤く染め（断じて赤い色素で染めたわけではない）、尻尾の蛇を振り回し（いつの間にかリボンがついている）、もじもじと可愛子ぶる兎。ぶっちゃけキモイ。

……………うん？もしかして私は、ライバルとして見られているのだろうか
いや、無理でしょ。鳥類愛好家でもない私が、若鷹さんを恋愛対象
に見れるかというと、結構無理がある。

「私は団長さんを思慕してないからさ、いらぬ労力をしてないで他に裂けば？」

正論を言ったのに、兎がさらに興奮した。何故だ。

「そんな言い方ないであろう！

……まあいい。お主の言、しかと忘れるでない」

兎が苛ついた様子で地面を足で踏む。

「ごめん？

…あのさ、団長のどこが好きなの？差し障りがなければ教えてほしい」

「ぬ、主には関係なからう！」

「ねえ、」

第三者からの声掛けに、私と兎は勢いよく振り返る。

「話し中のところ申し訳ないんだけど、勇者様とお話したいんだ」

亀王子がいた。

途端に跪き首を垂れる兎。その姿により、ここでは王族が神殿よりも力を有していることが明らかとなる。

うーん、個人的に兵士たちの反応から王族にかなりの影響を与えてると思ってたんだけど、読みが外れていたみたい。もしくは、『国

王一家』のみに付与される服従……かもね。

まあ、どちらにしろこの世界に骨を埋める気のない私には関係ないことだけだ。

「それで王子様、私に何のご用でしょうか？」

「敬語はいらないよ。…クルト、席を外してくれる？」

「かしこまりました」

巫女姫に命令できるってことは、王太子の権力も大きいのか。あと、クルトって言うんだ。コーンスープが食べたくなる。

「逢引の邪魔をしてごめんね。」

…兄の非礼を詫びたくて」

「兄、ですか」

「叔父…ラキアス団長のことだよ。僕にとって、あの人は兄みたいなものだから。」

…普段はあんな人じゃないんだけど、貴女には少し違った気持ちになるみたい。」

いりませんがなそんな気持ち。

亀王子は甲羅から首をのぞかせ、ゆっくりと下げる。

「でも、勇者殿には迷惑をかけてしまったみたいで申し訳ない」

そういうと、私の右手をすくい口元へ。

「え、」

と思った瞬間に、手のひらに感触が。

『いやあああああああ！！！！』

叫んだ。

私ではなく、外野である。

女性の叫び声はよく響くのだとわかった。

とにかくやかましい。

たかが亀にキスされたくらいでどうしたというんだ。

…あ、王子か。

うわぁ面倒くさいと思いつつ右手を取り戻し、やんわりと切り出す。とたんにむっとする王子。いやいや、私にするって時点でおかしいからね。

異文化というものを学ぼうぜ！

「申し訳ないのですが、私はこの国の習慣に慣れておりませんの。です、このような形をとられてしまいますと、私はいたたまれなく……ああ、そういえばクルトに用がありましたの。

では王子様、私は失礼させていただきます。」

そうして私は戻っていった。

親しげな王子キャラは嫌いじゃないんだけど、個人的にはクール王

子のほうが好きなんだよね。ツンデレってよりも、ただ感情が出にくいせいで勘違いされやすいからちょっとスレてしまう不憫王子がいい。

見た感じ、不憫集は全くしないのに近づく必要はないよね。そもそも亀にしか見えないし。

彼のお出ましです

俺はジエームズ！

しがない騎士の一人だ。

今日も俺は可愛い子ちゃんに熱烈アプローチ！

結果？今一人でいる時点で察してくれよ……

まあ、勇者様への忠誠を誓った団長に苦笑しながら了承する彼女は、巫女姫様に連行されていった。

いつの間にいたのかわからないが、俺の記憶が正しければ今の時間は『お祈り』をされているはず……。

まさかね。うん、巫女姫様に限ってそんなはずないよね。

とかそう暗示をかけていたら、王太子殿下の登場。

……って勇者様、アンタ殺されたいんですか？！

『あの』王子を前にして突っ立ってるなんて命知らず……！！！！

そうしたらやけに機嫌のよくなった王子が流れるような仕種で勇者殿の右手をすくい、口元へ……。

忘れちゃならないのが、口づけながら相手の眼をじっと見つめる……

上目づかいで。

こーいーに落ちちゃったー勇者さまー

とか外野は考える。

勿論その口づけの瞬間にメイドだとかお嬢様だとか巫女姫様の絶叫がすごかったよ。俺、鼓膜敗れるかと思ったし。

その絶叫の中、勇者様を見ると……平然としてらっしゃる。

うつわ面倒くさいという空気を隠そうともせずに王子に別れを切り出す勇者様。

ファイライ、国の二大美青年を目の前に、何も反応しないって……ア
ンタ本当に大丈夫か？

うちの王子なんて、瞬きをするだけで相手は恋に落ちると言われているんだぞ。

甘いマスクの顔立ちは、男でも惑わすんだぞ。

その美貌に全く反応しないのは団長だけだと思ってたのに、もう……

……勇者様武勇伝は限りを知らないんだな！

勇者様の遠ざかる後姿を、王子はじつと見つめる。

それがまるで肉食獣の狩りにおける目に見えたけど、気のせいだよな。

うん、きっと王子の眼鏡に反射した光の加減だよな。

……なんか小さな笑い声とか聞こえるけど、きっと幻聴だよな。

そんな時、王子の声が俺の耳に届いた。

『へえ、ナかせたいね』

その澄ました顔、ぐっちゃぐちゃにしてやりたい。

聞こえない。俺には聞こえていないからな！

魔王様と恋する兎と……亀王子（後書き）

最後の部分がまいちですみません。

あの、読者の方で気になる単語があつたと思うんですが、実は間違えではないんです。自分でも「明かしたい」とか思っていました…でも、ここで明かすのはなんとなく嫌でして…

それは後程判明しますので！

にしても、勇者編長い……

若鷹・亀王子vs老鷹を観戦するのは魔王様のみ（前書き）

はつきり言って、今回は後半部分からギャグではなくなります。
人によっては気分を悪くさせることもあるかと…
そんな方は是非とも回れ右でお願いします

若鷹・亀王子vs老鷹を観戦するのは魔王様のみ

三つ巴。

昼ドラにおける定番である。

恋愛における定番でもあるが、昼ドラのほうがドロドロしている感が否めない。もはや昼ドロだね

多角関係は複雑模様。それが恋愛関係なら泥沼模様

玉座は大広間に存在する。

そこは会議場ともなっていて、国の一大事には必ずそこで行われる。魔王を倒しに行く勇者のお供を選出するのも『国の一大事』と分類されるようだ。

しかし、それは今現在難航している。

私個人としては誰でもいい。

だから、今回は傍観者側とさせて頂こう。

「それが許されるとでも？」

若鷹が全身の羽毛を膨らまし、静かな声で告げる。

議場には静かな怒声が響き渡り、その場にいるものを委縮させるには十分なものだった。

美声の怒声って、こんなに腹に響くものだったんだ……

「お怒りは判りますが、我はこの戦いにどうしても参加せねばならぬのです」

「ラキアス、そんなに怒らないでよ。」

兎と亀の発言に、猛禽類独特の眼光鋭い目をさらに強める若鷹。相当な怒り具合だが、二人は平然と……否、飄々としている。煽るなよ。

「貴方たちはご自分の立場を判っていないのでは？」

口調こそ丁寧だが、その分周りの人間に怒りのほどを感じさせている。

とりあえず部屋の室温を下げるのはやめようか。

当事者ではなく、周りで傍観している者達に被害が及ぶとはこれ如何に。

そんな外野の状況を知りもしない若鷹は、くるりと体を反転する。

「王よ！」

「えっ、ワシ?!」

眼光鋭く、王子の父親であり自身の兄である王様にターゲットロックオンする弟の騎士団長。

うむ、老鷹vs若鷹ですな

「国王様、威厳が……」

「神官長よ、そうはいつでも我が弟を前にしてそんなことができると思うか？」

古狸が王様に進言するが、ヘタレ王は弟の恐ろしさを語りだす。

「アヤツはな、五歳の時に我を物理的にも精神的にも倒したのだぞ！下手に反抗してみろ、命をとられるわい！」

もうお前、弟に王位譲れよ

この場にいる殆どの者がそう思った。

二十以上も年の離れた男ざかりが、当時一桁の弟に負けるとかおかしいだろ！

これが一国の王の姿である。この国の大臣どもがいかに優秀かが判るというものである。

「まあ所詮、父上ごときですし」

王子 ！？

オブラート？何それ。

そんな態度で父を貶す息子。

え、何これ。親子中冷め切ってんの？

「まあ、ワシとしても早くお前に王位を継いでほしいんじやが……下剋上出されてもかなわんし」

それ絶対後半が本音だよね。前半は建前だよね。『誰に』とは聞かないけどさ！

「私（兄上）は王位に興味がないので」

父親よりも叔父との仲のほうが良好ってどうよ。
丸々太った鷹王の額から冷や汗が流れている。顔が悪い。……間違えた、顔が悪い。

「いや、どつちかという息子なんじゃが…」

「まだ私には荷が重いので、時が充ちたら頂きます」
「その時は手伝うぞ」

何この修羅場。

王子、アンタ自由な時間に飽きたら王位を継ぐって……

王様、ガンバ

「もうヤダこいつら……クルト、王族に帰ってくる気はないか？お前だけが清涼剤だ!!」

「え、嫌です」

バツサリ斬る兎。

「王よ、それでは巫子がいなくなってしまうす」

狸が嗜めるも、王は渋る。

「しかしじゃな、私の気持ちもわかってくれ。
クルトは我が従姉妹にそっくりなんだ。そして、非嫡子ではあるが我が子なのだ」

「…そんなこと言って、本当にクルトが女だったら貴方は政治のコマとしていたはずだ。
災難にも、顔だけは極上のあの女に似ているから、どこの男でも喜ぶでしょうし」

「口を慎め、息子よ」

王子が吐き捨てた言葉を王は一喝する。
なにこのいきなりのシリアス突入。ついていけないんですけど。
そんな周囲の困惑はシカトで四名は話を続ける。

「でも事実ですよね。」

リシア伯母上は国一の美女だった。帝王学には興味がないのに権力が大好きで……ああ、クルトの父親は貴方ではありませんよ。」
騎士団長がそれに加勢する。

「何を言っている、ラキアス」

「まさかご存じない、と？」

もしかしてクルトに王族の証があつたから自分だと？

教えてあげます、クルトの父親は 「止めてください、ラキアス様」クルト？」

若鷹の言葉を遮り、兎が口を開く。

「王よ、私が巫子となったのは自分の出自を知っていたからです。
私は王がご存じだと思っておりました。」

「あれは女狐だからねえ…ま、普通は子供に実の父親の名前を言っ
て聞かせて育てる、なんてありえないんだけど、相手を相当慕って
いたようだし。」

王子が加える。

王の驚愕を観察して楽しんでいるようだ。なんて性格の悪い。

「…それで、相手は誰だ」

唸るように王様は命じる。

先ほどまでの感情が嘘のように冷え切った声色は、彼が一国の王で
あることを痛感させるものであった。

「お断りします。

クルトが嫌がってますし」

「それに、頼み方というものがあるのではないですか？

私達が貴方をその椅子に座らせてあげていることをお忘れなく。

…別にいいのですよ？今この瞬間に、主を変えても」

王子の軽い口調に、硬質な団長の声加わる。

確信犯、ね。

魔王に狙われておきながら国を上手く纏め上げられなかった王を『

無能』だと称している、か。

それを直接的な言葉を使わずに言うなんて、腹黒の二乗としか思え
ない。

「だが、今現在はワシが最終決定権を担っておるぞ」

「馬鹿ですか？むざむざ皇位継承権をもつ者を絶やすなんて。貴方に世継ぎを作る力はないんですよ」

「王子も貴方の血をひいていませんよ。」

貴方が無理やり引き離れたある夫婦の子供です。

ま、それでも王族の血は貴方よりも濃く、王にふさわしいですが。」

「まさか、あの男が父親だということのか?!」

「何故嘘を吐く必要があるのです。はっきり言って、その方は貴方よりもその玉座につく正当な権利を有しています。……そうでしょう？兄弟殺しの、兄上」

「貴方は、私の母上が欲しかった。」

最初に見初めた時、母上は既に貴方の兄の婚約者だった。秘密裏に兄を亡き者にして、彼女を得た。

でもね、母上は知っていましたよ。あなたが裏に居た、と。だから貴方に心を開けなかった。一度きり臥所を共にしただけで孕んだことを不思議に思いませんでした？私が予定よりも早く生まれたのに、未熟児ではなかったことを不思議に思いませんでしたか？

答えは、貴方の息子ではないからですよ。

いくらこの国が出産における治療に優れていたとしても、何も問題なく母体を傷つけず産まれてくるなんてありません。知っていました？医者もグルだったんです。」

楽しそうに、

楽しそうに、

亀は嗤う。

父親の仇である育ての親を嘲笑う。

「お前など、産まれてこなければよかった。

知っていたら、目の前に今いなかったというのに……！
ワシを謀った、その者らには後で処分を決めよう」

顔を青くした王に、さらに若鷹は言い放つ。

「偽りの兄王よ、もう一つ素敵なことを教えてあげます。
貴方は本来、その席に座る血を有していません」

「…何？」

「貴方は、母上の不義の児です。

先代の王妃は一時期、帳に隠れた時期がありました。それは、浚われたのですよ。

その十か月後に生まれたのが、貴方です。」

「さて、謀りの王、これらを知ってもなお反論できますか？」

亀と若鷹の声が重なる。

王は崩れ落ちた。

とりあえず一言言いたい。

お前らの話が国家機密すぎて、
兎が男だったことに驚愕できなかったじゃないか！

若鷹・亀王子vs老鷹を観戦するのは魔王様のみ（後書き）

その時の周りの反応

（巫女姫が、巫子皇子だと……?!）

「つまり男の娘か」

（皇子って、国王の調子じゃないの?!）

「まあ、鷹と亀だしねえ…」

（え、王も先代の王の子供じゃないの?!）

「何この混沌とした血液関係」

もう三十年分は驚いたと思いますby聴衆の皆さん

（）はギャラリー、「」は魔王様のシッコミです。

一つ伏線ひろい忘れましたが、次回に持ち越します。

実はですね、本当はギャグで始まりギャグで占めるはずだったんですよ。

でもね、恋愛に行けなかったんだ。

若鷹が王様をロックオンした時点ですべてが狂い始めたんだ。

兎の恋模様は次に持ち越しです。すみません！

魔王様はようやく勇者として出陣します（前書き）

ジエームズが出ます。

遅くなつてすみませんでした！

魔王様はようやく勇者として出陣します

あの素敵な暴露会見のあと、意気消沈した国王（医務室連行）に変わり、亀王子がハイテンションで状況説明を始めた。それはもう割愛することにする。

すみません、外野のHPは一桁です。むしろMPかもしれない。

勇者パーティーを召喚するためには生贄が必要です

「よっし、騎士団長^{兄上}の了承も得たことですし」

「してないぞ」

「空気読めこのKYが」

「一国の皇位継承権を持つ王子が国を留守にすることを、現状を把握して空気読めと言いたい。」

最近さ、『空気読めよ』が普通になってない？『KY』から始まる『日本人は空気読めます』というレッテル……。たしかに空気読めると対人関係とか楽だよ？でもさ、日本人全員に共通とか思わないでほしいんだよね。ああ、確か異世界召喚のラブやらギャグやらでは結構「空気読めよ」って主人公が思っただけー。むしろこの世界ではその発言を傍観してるんだー。

王子と団長が言い争っている中、つらつらとそう考える。

「なら僕は行っても良いのでしょうか？」

「クルトは…戦力にならないから無理だ」

兎の自分を売り込む言葉に鷹は少し考え、小さく首を振った。

「なっ、僕は足手まといになりません！」

激昂する兎に、亀はここぞとばかりに駄目だしする。

「だってさー、クルト攻撃魔法使えないじゃん」

「召喚魔法があります！王子よりも活躍できる自信がありますよ」

「へー、言っじゃないか。今ここでどっちが使えるか勝負しようか？」

どどん雲雪の怪しくなる二匹の会話に、鷹が一喝する。不憫臭がする。

「やめんか馬鹿ども。お前らが暴れたらここが崩壊する！」

「崩壊するくらい強いってことでしょ」

ハモる兎と亀。よく考えたら、昔話ではこいつら喧嘩してなかった？ いや、かけっこか。昔話の動物同士の争いって、子供には聞かせられない裏事情とか多々あるよね。異類婚姻譚とかさ。いや、むしろ古事記とかもRといえばRなんだよね。『欠けたところを余りあるところで塞ぎましよう』を女生徒に言わすとか、もはやセクハラ…うん、黙りますね。

「城の老朽化を考えろ」

（そっちか…）

場内の皆さんが何とも言えない表情になる。数人は成程と言った表情だ。経理担当の者は「ああ、そういえばそんな時期か」と小さく呟いた。費用捻出頑張れ。実はまだ戦時中だけど頑張れ。

…というか、

「老朽化しても、城であることに変わりはないんだから耐久性はそこらの建造物より優れてるんじゃない…」

代弁ありがとう、見知らぬ兵士よ。

「その雷鳥の爪の騎士、兄上の部下ながらやりおるな！」

あ、やっべという様に慌てて視線を斜めに向けて『俺は知らない』ポーズを決め込むカワウソっぱい兵士（騎士）に、亀王子は親指を立てる。

「ジェームズ、貴様は後で話し合おうか」

くちばしをカチカチと鳴らし、捕食者の眼をする若鷹騎士団長。カワウソは食べても腹は膨れないと思うよ。しかしカワウソとか何これ可愛いじゃないか。周りが猛獣コーナーに居そうな奴とか、個人的にあまり好きになれない動物の中、彼だけがその愛らしさにより際立っている。かーわーいーいー。その隣で心配そうに表情を伺っているカンガルーネズミ君も可愛い。二匹とも無骨な武具に身を包んでいるというのに、可愛さが伝わってくる。

「ねえ、ジェームズって言うの？」

思わずカワウソに話しかける私。名前も覚えやすく、常識的な考えを持つ。…なるほど、勇者一行のお供にピッタリじゃないか。

「っはい、俺…いや、私は雷鳥の爪騎士団五番隊所属のジェームズですが…」

びくつと体を揺らし、恐る恐る返事をするカワウソ。うん、離れたところからの若鷹チームが怖いんだね。

「この旅にwelcome」

につこりと、笑顔で誘う。気安く感じてもらうために、相手の方に軽く片手を置く。途端に潤む彼の瞳。

「目にゴミでも入ったの？」

大丈夫だろうか。じっと見つめていると、どんどん青くなる顔。まるで血の気が引いたようにという表現に最も適した顔色だ。その隣にいるカンガルーネズミ君がものすごく慌てた表情となる。持病か。同じ旅を共にする仲間の健康が心配だ。

「勇者殿、もしかして彼をこの旅に連れて行くつもりですか？」

「勿論。何か問題でも？私と彼は良い相性だと思うから、一緒に居たい。」

主にツツコミポジションとしてな！癒しポジションで必要だよ。私の精神安寧上。カワウソ君の堅そうな毛皮をなめしたい。

「…そうですか。なら、ここにいる五人で行きましょう」

「りょーかい……………ん？五人？」

「ええ、私と王子とクルト、ジェームズと貴女　勇者殿です」

背後の兵士たちを下がらせる何かを纏ったラキアスが、ゆっくりとこちらに近寄る。なんでだろう、今すぐこの場からジェームズを逃がさなければならぬ気がするのだが。…うん、私の直感は八割がた当たらないから気のせいだろう。

「それでは勇者殿、我々は荷づくりや引き継ぎなどもあるため、こ

れより失礼します。……ジエームズ、行くぞ」

硬直したカワウソを器用に引きずる若鷹。いつも思っただけど、どうやって物をつかんでいるのだろうか。

会議はお開きだっていうし、そろそろ私も退室しますか。

決して亀と兎のコンビに話しかけられなかったわけではない。周りの騎士団たちが壁になってくれて妨害してアイコンタクトで『逃げる』とか聞こえた恐怖心からでもないよ。…後で差し入れを持つていこう。

ああ、カンガルーネズミ君の名前も聞いておけばよかった。彼にあとでジエームズの持病があるかどうか聞いてみよう。

お待ちかね（？）のあの人です

どもつす、ジエームズです。

只今、本来俺の仕事じゃないのに、会議場の警護を申し付けられてまーす。今日休みのはずなのにここにいるっておかしくない？

「自業自得」

親友の一言が胸に刺さる。そうだよ、賭け事に負けるほうが悪いよ。すっからかんだよ。

「おい、そろそろお偉方が集まる。…ちゃんとしろ」

こちらに目を向けず忠告する親友。このクール美形め！

へいへいと軽く返事をする、甲冑から覗かせる若草色の眼が、あきれたように俺を見る。美形は滅びろ。美形なのになんで俺ら親友なんだろう。…こいつ以外の美形は滅びろ。

会議が始まった。しかし一向に進まない。

「会議は踊る…」

勇者様がポツリとつぶやく。誰も踊っていないのに、どういう意味だろうか。もしかしてこの進み具合のことを表現しているのか。

勇者様の無関心を脇目に、王族たちの話がどんどんあらぬ方向へと進んでいく。いやまあ、自分たちで品位を落としていくのはどうでもいいんだけど、ここには王族に夢を抱いて就任している人たちもいるんだから、そこらへんよく考えたらどうなの、とか思う。なぜこんなことを言っているかというと、俺の母方の一族が王族と関係の深い者から酷い目にあわされた為に、国民の皆さんと比べて尊敬できないからだ。

自分でもそれは眼前にいる王族を恨む理由とならないことは判っている。でも、血縁関係などを考えてしまうと、この感情は捨てられないのだ。

（とはいえ、恨んだとしてもどうしようもないんだけどな）

そう思い、考えを払拭させる。

思考が暗くなってしまったため、仕事に集中することにする。俺えらい。

「クルトは我が子なのだ……」

「っておい、何があった。しかも巫女姫様じゃなくて、『神子』……男だと……?!」

「クルトは貴方の子ではありません」

王子、ご老体は劳わりましょう。そして王はそれをご存じじやなかったんですね。どっからどう見ても、貴方の遺伝子を一ミクロンも受け継いでいないじゃないですか。眼の色こそあの人と違います。その色もあなたとは異なってますよね。先祖がえりとか、貴方の血ではおこりえないですよ。

更に王子も貴方の子じゃないんですか。それは知りませんでした。
とはいっても、甥ですからまあ……ええええええええええええええええ、
やめて、そんな国家機密語らないで！！！！！！！！俺ら兵士
はまだ死にたくない！口封じとかマジしないで！

どうすんの?! ねえどうすんの、王の血をひいてないのが玉座に座るのって、僭主とかいうんじゃないかってつけ。・・・え、違う? まあとにかく、

「王が倒れたぞー！」

救護班カモン！

「あつれー、会議ってこんな国家機密を暴露するようなものだっけー？俺わかんない。」

「若干の休憩をはさみつつ行われた。勇者一行の旅に誰が行こうか」

の会議。

不用意な発言により、強制参加決定。

よい子のみんな、口から出た言葉には気を付けようね（経験者は語る）

カンガルーネズミの胸中

俺に親友のジェームズは、運が悪い。それは彼の一族特有の物らしく、対象は王族にまで及んでいる。過去に彼の母親がその被害にあったそうで、彼が今世に誕生していることが奇跡としか言いようがないとか。

そんな状況に陥ったのは、王族の不手際としか言いようがないらしい。

とはいえ、何か起きたら王族に頼むというこの国のスタンスは少々おかしいのではないかと思う。解決する側は必ず王族側の人間が行う。国王制の基盤が揺らいだら、この国の善悪は歪むのではないだろうか。「正」を声高に言える権利を持つものが揺らいだら、その「正」までも効力を失くしてしまう。「正」を唱えられるのが一団体しかないことも、この国を破滅へと至らすきっかけになるだろう。

『不手際』は、王族のせいであるが、そうなったことの全てに彼らの責任が問われるわけではないのは判っている。

それでも思わずにはいられないのだ。『彼らが止めてくれれば』

と。実際、彼らはそのことを把握していた。証拠不十分で止められなかったと語っていたが、された側としては許すことなど叶わない。直接関係ない者同士であっても、そういった確執は産まれてしまう。きっと彼らが当時を振り返るなら、こう思っているだろう。

『ハッピーエンドには犠牲が必要』だと。

それは正しいし、否定できない。

『誰もが幸せになれる』

そんなのおとぎ話ですら存在しない。

敵も、味方も、第三者も幸せになれるだなんて。それは認められないし、認めたくない。

でなければ、あいつの状況を説明できない。

だから、こうなったのではないか。

王族三名の漫才にツッコミを入れるアイツ。ジェームズ
勇者殿から興味を抱かれるアイツ。ジェームズ

「この旅にウエルカム」

ウエルカムってなんだろう。ああ、強制連行のことか。

勇者殿、『カワウソ』ってもしかしてジェームズのことですか？
あいつはどっちかというところ、今巷で人気の『ハムスター』なるものにそっくりですよ。あの狭いところに入りたがるところとか。

ああ、ジェームズの顔真っ青になってらー。

とりあえず頑張れ。

親指をぐつと立てたらジェームズに睨まれた。なんだ。

「え、持病ですか？特に俺は聞いたことはありませんが…

……ああ、必要以上に王族の方々に近寄せないようにしてください。それだけです」

魔王様はようやく勇者として出陣します（後書き）

ちょっとブラックなので、読み飛ばしたほうがいいのかもかもしれません

今回何を言いたかったかというと、

「誰もが幸せになれるなんてありえないんだよね」ってことです。
最近読んだ「なるう」さんの小説で、ものすごく気に食わない終わりだったんですよ。誰もが納得している終わりなんです。

内容が、というより心情がおかしい描写が沢山あって、「これが幸せ」だと思い込んでいるようにしか思えないんで、読んでてイライラしました。

三角関係になったのは判りますが、『「私の「夫」とか、何度も入れんな。お前が奪ったんだろ、被害者面すんな、そういう状況に陥ったのは、自分の浅はかな行動のせいだろ。根本的に「正」を間違えてる。とかね。作者さん、書き直したほうがいいですよー。ここですとつと呟いてみる。

いやね、私優しくないですから、『ここをこうしたほうがいい』とかあまり言わないんです。本人を傷つけてめんどくさいことになるのとか嫌いですし。「これおかしいんじゃない」メールを送る時間とかもつたいないですし。時は金なり！

…好きな作者さんには、こっそり評価点入れたりとかしてますよ。
たまに感想とかも送らせていただいています。

なんか黒いあとがきになったなー。

みーつにおいては、長編とかのジャンルでもないの、短編集的な

感じで好き勝手に書いてますが、白黒はつきりさせて書くつもりです。
てます。

普段あまり書かないように書いているので、ところどころ文章がおかしくなってるのはそのせいですとかほざいてみる。

魔王様はようやく勇者として出陣しました（前書き）

今回は長いです。そして早めに投下できました。やつほーい！
途中で「みーつ……？！」となりそうです。

魔王様はようやく勇者として出陣しました

「あと少しで魔王城に到着だ。皆、油断は禁物だ。
気を引き締めて行こう！」

こんにちは。こちらでは灰色の雲が頭上を覆っています。
皆さま如何お過ごしでしょうか。このたび、勇者ポジションが付
加された魔王です。

只今、同族狩りに駆り出されています。

もはや誰が勇者だ

普通、仲間を鼓舞するのは勇者の役目かと存じ上げますが、この
パーティーでは亀王子がその役目を担っているようです。私として
はリーダーシップをしたくないのでどうでもいいですが。

そして二度目の自己アピールですが、もふもふ分の足りない魔王
です。決して『勇者』ではありません。ええ、RPG勇者ゲームで
必ず主人公に苛つとしていた私が勇者なわけないじゃないですか。
クールイケメンキャラにキャラ崩壊上等で『きゃあきゃあ』してま
したが何か。熱血とか、うじうじしたのって嫌いなんですよね。ほ
ら、主人公って一番心理描写されるじゃないですか。どうせなら無
口キャラとか、そういったキャラの心理描写がいい。きつとうじう
じしてないだろうし。…え、偏見？きつと『思い込み』ってやつで
すよ。その葛藤が魅力の一つと言われてしまえばそれまでなんです
けど、好みて人によりけりだし、とか言い訳してみる。

とまあ、私が勇者ではないと「勇者様、そろそろ作戦会議をし

たいので」……………違うんだよこれは…そう、あだ名なんだ。

「お主、そろそろ現実世界に帰ってこい」

バニー巫子がぱしーんと私の頭を叩く。その手にある扇はどっから出した。

「クルト、何で女装してるの？」

「今更だなおい！」

カワウソ・ジエームズが叫ぶ。^{ツッコム} いや、だってねえ？扇はそういうものだとしておくにせよ、女装…否、巫女服ってどうなのよ。

真っ白でふわふわな毛皮を淡い水色のRPGゲームに出てくる巫女さんが着ているような絹で隠している。両袖にはぐるりと紐が通してあって、それぞれに銀色の鈴がついてる。動くたびに軽やかな音を立てるそれは、魔よけの役割も担っているとか。

なかなか鋭い爪のある指にはどうやってついているのかわからないけれども指輪がついており、さらに手首には繊細な模様が施されたバングルを嵌めている。巫子の衣装だけで豪華な屋敷が一軒買えるとか、この世界において彼が重要な役割についていることを知らしめるのに十分だった。宗教の権力凄い。

そんな宗教権力の強い神殿がどうして国王一家に跪いてはいるが服従していないかというと、彼らの崇める神が王族の守護神の子供だからだそうなの。『え、それだけ？』と思わなくもないが、これがまた重要なことだと。

もしも神殿で崇めているのが王族の守護神だったら、神殿は王族に服従していると採れる。王族のために存在する宗教だ。つまり神殿の代表者^{トット}は王族しかねないことになってしまう。

この世界は私からしてファンタジーであるから、神殿に使えるも

のしか使えない能力スキルがある。

じゃあその能力スキルを王族が所持していなかったら？
となると、『神殿Ⅱ神聖な力』の構造が崩れてしまう。

そもそも、神官になれるのは 特 別 偶像視できる な力が必要であり、それには身分も何も関係ない。この力は突発的なもので力を持った者の子が必ずしも力を得ることはなく、神殿内には親の身分が多様多様である。神殿内において親の身分など関係ないが、事実であるために皆淡々とそれを口にする。敬ってほしいわけではないが、聞かれたから只答えるような、そういう態度。

ただ『国民である』この条件を満たしていれば、力持つ者なら誰でも神官になれる。もちろん拒否も可能である。しかし力を持った彼らは希少であり、給与も普通に働くよりも多くの金を得られるとあり、基本的に歴史上の数人を除いて辞退する者はいないそうだ。

この世界は、宗教と王権の分離が基本的だ。宗教は政治に関われないのは周知の事実であり、それを破る者は死あるのみ。

この世界における宗教は民衆のよりどころであり、一種の医者的な役割である。神官の持っている特別な力とは『医学では治せない怪我や病』を直すための力であり、逆に『医学で治せる病気や病は、特別な力では癒せない』という。だから神官は誰も驕れない。驕ればその矛先は自分に帰ってくる。自分が怪我をしたとき、病を得たとき、誰も助けてくれないのだ。それは死ぬまで続くという。放置される

その神殿の中でも狸の次に位の高いクルトは、出会った時からずっと女性ものの衣装を身に着けていた。色々なバリエーションがあるけれど、色とかは全部同じ。装飾品とかで印象を変えるとか本人は言っていた。

「この格好か？これは戒めだ。
私は二度と還俗しないという、な……」

シリアスやめて。これはギャグなのよ。小説タグにおける『過去に影』みたいな話とかやめて。それ確実にヒロインの相手役とか、恋愛陣の定義だから。それに女装が戒めなんて聞いたことがない。

（この話に恋愛を求めてはいけません）

恋愛…ああ、そういえばクルトが前に若鷹に恋しても無意味とか言ってたよね。それってつまり、二重苦の恋に苦しんでるから……？！

「……クルト、私は応援する。

たとえ生涯独身を貫かなきゃならなくても、相手が同性でも、好きなものは好きなんだよね！」

「一遍お主の頭を覗かせてみてくれんか？……大丈夫。痛みは一瞬じゃから」

「さわやかに殺害予告出さないでください！」

真顔のクルトに愛らしいカワウソが叫ぶ。しかし兎はシカトし、私に声を荒げる。何故だ。

「そもそもな、相手が同性ってどういうことだ！」

「いや、だってクルト前に言ってるじゃん」

「言うわけなかるう！」

「自分がいるから騎士団長に恋しても無駄だって。」

「どんな解釈したらその思考回路になるんだ？！」

「ねえ、それって前二人が逢引してた時のこと？」

亀が会話に加わる。

あのさ、私の野生の勘が貴方様に近寄るなど言ってるんだけど、どうして？ いやね、ジエームズも『やばい、あれはやばい。喰われなくなったら勇者様は二人きりにならないほうがいいです！』とか言ってたんだけどね。私はかわいい子の味方だから必要以上に近寄ってないけどさ…

「逢引って……それって知人のいないところですか？ そうですね。どう考えてもあそこはそんな場所じゃないですよ」

メイドさんとか、城で働いている人や貴族の方などが通る渡り廊下（１Ｆ）だった。

「だって、男と女が二人きりで熱く語らってるんだよ？ これのどこが逢引じゃないっていうのさ」

「まず、私とクルトにそういった男女の^{恋愛}関係を求めないでください」

兎と恋愛はごめんだ。観賞用としては好きだが、尻尾に蛇が生えているし、なにより種族を超えた愛っていうのは御免こうむる。もう贅沢は言わないから、地球人と結婚したい。「国際結婚？ 遠慮こうむる」とかもう言わないから、せめて地球人がいい。

そもそもさあ、クルトってかなりの美少年なんですよ？ なら相手はより取り見取りなわけだし、彼らからして『異世界人』という価値しかない私に恋愛感情を抱くのって、ありえないし損しかない。自分たちの常識を全く知らない女のどこに惚れる要素があるのか判らない。「初々しい」所、と言われたら、その世界の生娘はどうなるのさ、と思う。『姿かたちが珍しい』だったら、それは私を人間としてではなく『観賞用』としての価値しか見出してない、ってことだよな。

「男女関係を一つの形しか知らないのって、王子は悲しい人なんです
ね」

私の内心の変化に、王子は片眉を上げた。

でも、私は自分の考えを撤回しないし、したくない。二人で話したから恋人だ。ご飯を食べに二人で行ったから恋人だ。そう
いうのって、かなり失礼なことじゃないかな。

男女関係って、どうして恋愛としか結びつかないんだろう。上司
と部下の関係とか、友人関係とかあるじゃないか。

「じゃあ、君が教えてくれるの？」

亀王子が私の眼を凝視して呟く。ちょっと近くありません？

「今の関係がそうじゃないですか。……勇者パーティーの仲間
でしよう？」

この旅が終わっても、この関係は変わりませんし」

「そう、だね……」

亀の声が小さくなった。

ちょっと離れたところでのカワウソと若鷹

「俺、アレ知ってます。フラグクラッシャーっていうんですね」
「フラグ？」

「恋愛におけるきつかけみたいなやつです。今巷で人気の恋愛シミュレーションゲームにおける特殊用語です」

「何故それを知ってるんだ…？」

「俺の親友がそれを好きだからです。『三次元より二次元の嫁』とか言っていました」

「あの顔でか…人は見た目によらないな」

「俺からしたら残念な美形ですけどね。」

…団長は勇者様とフラグたてに行かないんですか？」

「私の場合は恋愛感情じゃないからな、どっちかというと主従関係と言ったほうが正しい」

「残念な美形がここにも！」

…というか団長、確か騎士団の就任式で『国のために戦う』とか言ってますでしたっけ？！」

「大義名分て大事だよな。……本音の隠れ蓑として」

「国家に背くとか本気でやめてください！」

魔王様に戻ります

この勇者一行のおかしなところは、イベント総スルーで魔王城に向かっているところです。

王子に聞くと、『そんなことやってる暇あるわけないでしょ。迅速に根源を叩き潰さなきゃね。少数の人間と世界の人間、どっちをとるかなんて考えるまでもないよね。』

冷たい発言だなあと思っていたら、若鷹が詳しく説明してくれた。そういう村の願いつて魔物討伐だから、一匹ずつ倒すよりも頭を倒したほうが早いという。魔物は魔王の力の一部だから、魔王を倒せばいなくなるという。水道の水が流れていたら元栓を閉めましよう、という原理か。それにしても王子の言葉は酷い。

というわけで行路省略して現在魔王城です。クルトのテレポートでやってきました。王城からテレポートで行ける範囲まで、というようにした結果、魔王城の入り口付近に着地完了。結界が張ってあるらしく、最終決戦の場にどーん！と現れることはできないという。それはそうだよな。

てなわけで城の入り口から侵入開始で、只今中間地点位かな。後残すところ魔王のみ、という立場によつては「この賊め……！」と歯ざしりしたくなるほどの快進撃っぷり。私は全く戦っておりませんが。

主に王族たちが戦っている。ジェームズは私と一緒に後方支援という名の見学者。

人間の侵略
そうして魔王退治が、ハジマル。

本当は、こんなことしていいのか判らない。

周囲に嵌められたとはいえ、結局は自分の意志を持って『魔王』
となった私が、このセカイの『魔^{わたし}王』を倒していいのか。

だって、私に何の関係もないのだから。

私を得られたのは人間側からの情報で、魔王側の都合^{都合}は一切ない。
私が存在を認められた世界での人間たちも、魔^{わたし}族側を自分た
ちの情報で決めつけて隙あらば滅ぼそうとする。

確かに、私たちの中には人間を主食にする者もいる。それは肉で
あれ血であれ精であれ、食べていることに変わりはないから、言い
訳はしない。

でもね、少し考えてみてよ。

貴方たちだって私たちを食べるじゃない。

人魚は、不老不死の霊薬として

ドラゴンは、貴方たちの身勝手な薬の一部や家畜として
ダークエルフは、貴方たちの慰み者として

貴方たちに喰われているじゃない。

これのどこが私たちと違うというの？

人魚は人を惑わす？

貴方たちは知らないでしょう、彼女たちは海を慰めているのだと。
彼女たちの歌なくば、海は荒れ別の大陸へ渡ることさえ出来はし

ない。

陸の生き物を守っている彼女たちを、どうして食べることができ
るの？

ドラゴンは凶暴？

彼らは理的で、自分達を辱める者にしか攻撃しない。
貴方たちは誇りある彼らから報いを受けているだけ。

仲間を家畜辱められたにされたドラゴンの怒りを受けるのは当然でしょう？

ダークエルフは悪？

彼らが何をしたというの？

ただ彼らはエルフたちとは異なる風貌と文化があるだけじゃない。

それなのにどうして貴方たちの奴隷おとなしにされてしまうの？

それでも私は言わないのだ。

これは私が新たに存在を許された世界における事実。

この世界では、まったく異なるかもしれないから。

これ以上関わってはならないだろうから、もう帰りたい。

二度の記憶の欠落を、もうしたくないのだから。

だからもう、サヨナラしたいのだ。

この世界に私の居場所が作られる前に。

魔王様はようやく勇者として出陣しました（後書き）

しりぎれとんぼ！

なんかですね、後半は魔王様の、「魔王」でいられる世界の迫害される存在の説明です。

立場によつては「正しい」ことが、逆の立場の人からすると「正しくない」ことになりますよね。

「正しくない」からといって、「間違っている」訳ではないこともあります。

そんな矛盾……いや、迫害されてしまう側の実態を知っている魔王様が、「魔王」の世界でのことを思い出して語る……っていうのが今回です。

「言わない」のが、魔王様らしいんですね。

彼女は『関わらない』ことを主軸に、「勇者」の世界で生きようとしています。

だから、「勇者」の世界では何も学ばうとしないし、理解したくない。だって、理解してしまつたら、ここに「存在する居場所」を求めてしまいたくなるから。

逆に、「魔王」の世界では学ばし、理解しようとする。

もう「存在する居場所」が無くなり、「その世界しか受け入れてくれないから」

なんだか若干ねたばれっばくなつてしまいました……まあいっか。しかし初期の軽さが消え失せてしまつたな……どんどん重たくなってくるw

……… 本当は二人の会話で終わってたんですけど、なんだか物足りなくなつてしまい。こんな長さに。

後悔はしていない！

長い方が好きな人への、感謝です。

短いのが好きな人はごめんなさい！

魔王様うおっち魔王あんど勇者ぱーていー

わん（前書き）

おそーーーーーーーーーくなりました！

しかも中途半端です。

「わん」はone・・・1です。

犬の鳴き声ではないです。

魔王様うおっち魔王あんど勇者ばーていー わん

やってまいりました魔王城の魔王の間……へ続く扉の前。
RPGにおける最終決戦 ラスボスじゃないよ、第一段階だよ
という状況にあります。

勇者な魔王様はラスボスな魔王と対峙します？

どうも。多分この世界で一番の傍観者な魔王こと悠です。…絶対私の名前を憶えてる人って少ないよね。

十分な休息レックの時間をとるために扉の前に立ち尽くしていた私たちは、最終確認をとる。

「基本的には勇者様とジェームズは何もしなくていいです」

後方支援という見学ですね。

若鷹の言葉に、私とカワウソは無言で首肯する。だって痛いのきらいですもの。しかしカワウソは若鷹に苦言を呈する。

「…いや団長、俺一応騎士なんですけど。」

更にいうと、何かあった際に身分の高い人の盾になるのが仕事なんですけど…」

「お前は魔王戦に使えん」

「ハッキリ言わないでくださいよ！」

まあ、生存率が高まるのだから大人しく守られてればいいんじゃないかな。騎士としての馬鹿らしいプライドがあるのなら、まあどうぞ生存率の低い戦いに挑んでください。

「だつてさ、ジエームズ」

おい王子、

「……私今、口に出してました？」

「『騎士としての馬鹿らしい（略）』と言っておったぞ」

「わお、乙女の嗜みにかけちゃった

…おいそこ、何も聞きませんでしたというように目線をあさっての方向にするな」

特にカワウソ！

「そんなところも素敵です」

「だまれ変態。」

若鷹が恍惚として言う。だから私鳥類愛好家じゃないから。

「ラキウス殿を変態と呼称するのはお主だけだぞ…」

「変態以外に何と呼べと？」

「普通に名前とか、おちゃめに『下僕』とか…」

「そうしてください」

亀のふざけた言葉にキリツとした顔で下僕と呼んでくれという若鷹。だれかこいつをどうにかしてくれ。

「クルト、未だに兄上の性癖を判ってなかったんだね…」

「確実に王子だけしか知らなかったと思いますけど?!」

「ジェームズの言うとおりだ。私は勇者殿しかこのような気持ちを抱かない!」

「たいちよおおおおお!!!」

「なんというか、憐れよの…」

なら止めるよ、矯正してやれよ。とは言えなかった。そして若鷹、答えになってない。

「つーか俺ら、最終決戦の場にいるんですから、こんなコントみたいなことしてる場合じゃないと思うんですよ」

カワウソのもっともな意見に、一同沈黙する。

「確かに相手を待たせるのは失礼に値するな」

「兎は寂しいと死んじゃうからね」

「お主らの観点がおかしい気がするぞ?!」

上から若鷹、亀王子、兎巫女の会話である。王族って、ろくなのがいないな。バニー^{クルト}巫女は細かく言う王族ではないのでカウントしない。そして亀王子よ、なぜ兎を例に出す。

ツツコンでいいのか判らないこの状況で、カワウソは早くこの旅を終わらせたい理由を語る。

「それに俺、帰ったら兄貴の結婚式に出席するんですから、とつとと帰りたいんです…」

「これぞ脂肪フラグ」

「セルロース違う。死亡フラグ」

「あんたら失礼すぎるな、おい！」

亀の言葉に私がツツコミカワウソが叫ぶ。

仕方ないじゃないか。一発変換で最初に出てきたんですもの（by 作者）

「いや、むしろ死亡フラグを何気なく口に出すお前のほうが悪いだろ…」

「隊長の裏切者——！」

「味方になった覚えはない」

カワウソは撃沈する。というか、この世界にも『フラグ』なんてあったんだね。（魔王様は若鷹とカワウソの会話を聞いてません）

「いいよ、俺の味方はあいつが親友いれば十分…」

親友って、カンガルーネズミ君のことだろうか。そしてジェームズよ、このまま新たな世界の扉を開かぬように生きろよ。勘違いしてしまいそうになったじゃないか。よかった、この目のオプションがあつて。

ちなみにオプションは、自分に対する好意を除く、その他すべての感情が霽がかった色として目に写る。恋愛感情はピンクです。つ

いでに言つと、ジェームズからは友情の色しか見えない。

「え、君ら出来てるの？」

この亀が！私の内心の罵倒を知ってか知らずか、ボーイズトークが始める。

「俺とアイツは親友ですが。というよりも、あいつの恋愛対象は画面上の女性（うっふんあっはん系）なので、俺と奴の蜜月が生まれるわけがありません。ええ、絶対に。」

「そこまでマシントークされると、逆に怪しいぞい。ほれほれ、吐け」

「まあ、子供なら養子をとるという手もあるからな。自由恋愛してもいいぞ。ただし、勤務中には控えることが条件だが……」

「もうヤダこの王族！」

こうして最終決戦の扉一枚隔てたところの会話はジェームズをいじることに、男性陣は燃えていた。

ぼっち寂しい。

「「「お邪魔します」」」

ようやく部屋に入室しようとすると、兎を除く男陣がそうのため

った。

「何を言っておるんじゃ?!」

「え、やっぱり知らない人の居住区と言ったら挨拶が必要でしょ」

「そうですよね。俺も母さんに叩き込まれました」

「ほう、いい母上だな……クルト、身分があつても礼は大切だぞ」

上から兎・亀・カワウソ・若鷹の言葉である。

「え、我が間違っておるのか？」

「いいやクルト、^{バー}奴らの神経が図太いだけだよ……」

そもそも礼節以前に、私たち魔王城に土足で無断侵入してるからね。

「何で今回の勇者は変人揃いなの？」

おいまで、なぜそこで一括りにする。

振り向いた先にいたのは、大きな玉座に鎮座する……黒い球体^{仮面}。

靄がかった物体の、仮面の目の位置に当たる部分はこちらに向いている。そして再び玉座から私たちに問いかけた。

「今回の勇者は、誰？」

その言葉に、4人の視線が私に降り注いだ。待て、私は勇者なんて認めていない。

「そう、あなたが………っ?!どうして、あなたがこの世界にいる?!」

黒い靄が驚きの声を上げた。今更だが、魔王が黒い靄でも私は驚かんぞ。むしろ予想してた。………大丈夫、魔王!!美形なんて構図、自分で破壊してるし、この眼のおかげで美形ウオッチングできないって知ってるから。あれおかしいな、涙が出てきたよ。

黒い靄・・・以下魔王にしよう。魔王は、私の存在に気づいてるみたいだ。じゃなきゃ…ねえ?テンプレっぽい発言しないでしょし。

魔王に私は立てた人差し指を口元にあて、黙っておくようにジェスチャーする。相手は判ってくれたようで、それ以上の詮索はしないでいてくれた。だからまあ、理由位は伝えるべきかな。

「いわゆる、成り行き上。」

「そう、なら仕方がないのかな。あなたの存在は、この世界でも異質なんだね」

うん、そうだ。私はこの世界でも、元の世界でも異質だろうね。^{魔王}

^{人間} 前の世界で許容されていた私が次の世界に落ちたとき、異質になってしまったのだから。でも、それはもういいのだ。私という存在を求めてくれたのは、その世界が最初だったのだから。前の世界は私を認めてくれた。でも、離さないでくれなかった。そうでなければ、私が月竜国という国でトップになどならない。その世界に落ちてきたりなどしない。最初の世界よりも、次の世界のほうが私を求めてくれなければ、そんなことは起きない筈。

「何故あなたがこの世界に関わる?」

「うん、私もそう思う」

彼の言うとおり、私がこの世界に関わる義理はない。関わりたくなどなかった。

それでも、関わってしまった人がいるのだ。

彼らの生活を脅かす存在が悪意あるものであるならば、私はこちら側につかなければならない。

私の想いをくみ取ってか、彼は逡巡するように瞬いた後、私に告げた。

「じゃあ、あなたにはこの戦争のきっかけを知るべきだね」

「人間と魔族の争いだけじゃないの？」

彼は一瞬酷薄そうに揺らぎ、多分嗤ったのだと思う。軽蔑の色合いだっただから。

「巻き込まれただけのあなたに昔話をしよう」

「ある魔族の娘が人間に殺されました。それも、ただの暇つぶしという名の最低な理由で。」

その娘は、もうすぐ結婚するはずでした。実は彼女のお腹の中には子供もいて、それは娘だけの秘密だったのです」

魔王は言葉を区切る。

「そうして、全てを知ったその夫となるはずだった魔族は人間を恨みました。」

「その後、魔族を殺すことに快楽を満たした人間たちは、何人も何人も魔族をとらえては殺しました。それは実験・家畜としての扱いなど広範囲に渡るようになりました。そうして、人間は今度は別の魔族の娘を捕え、殺しました。

彼女もまた、婚約にある身でした。魔族の中でも高い地位にいる男と結婚するはずだった彼女は、清らかな体を持ち、その身を初夜に捧げるつもりでした。」

「そうして、彼が救い出したときには、彼女は身も心も壊れていました」

「体が人と同じであつたときは慰み者として体が元の姿になった時には食物にされ。

少女は、神聖な生き物だったのです」

「『清いから穢したくなる』」

彼女は、そういう性質をもった魔族であり聖族だった。

人間はね、綺麗なものに二つの感情があるんだよ。

『汚せないほどの美しさ』と『汚したくなる美しさ』のね」

憎しみを籠め、彼が呟く。

ああ、貴方だったんだ。いとしい人を失くしたのは。

人間側が沈黙を守る中、彼の言葉は続く。

「先に害を加えたのは、人間だよ」

それでもあなたは人間のために戦えるの？

「私は、はっきり言ってこの世界に関係ないよ。でもね、不本意なことにかかわらざるを得なくなってしまうんだよ。それも魔王退治とか言う名目のせいだ」

そのきっかけを作ったのは、貴方だ。でも、そうさせたのは人間で、

ああ、結局誰が悪いの？

逡巡する私を見つめ、彼は声を響かせた。

「もしあなたがこの世界を恨んでいるのであれば、僕の隣に来ない？」

うらむ？

世界から切り離されたことを？

そんなこと、もう二度目だ。一度目よりも怒りは少ない。

この世界で誰が正しくて誰が正しくないかすらわからないのに、私に選択をさせるの？

ぐるぐるする。

気持ち悪い。

吐き気がしてきた私の思考回路。そんなとき鼓膜に、涼やかな、でも怒りの混じった声が入り込んだ。

「断る。」

その誘いに否をと答えたのは若鷹であつた。

「彼女はお前の隣になど立たない。」

「何故、君が決めるの？君は彼女と関係ないでしょう？」

「関係ある。俺にとって、大切な……」

「ご主人様だ！」

どーん、という効果音をつけたくなる見事な仁王立ち。場内は無言に陥る。

……。

「この方の隣に立つなんて、そんなおこがましい事を考えるのは罪！むしろ下に跪くのが道理であり喜び！」

「ねえ兄上、もしかして勇者様の立場が変わったら兄上の立場も変わるってこと？」

「立場？変わらんぞ。」

俺の立場は勇者様の配下だからな」

亀が『こいつまじどうしよう』という顔をした。兎は『どうすんの』という顔をこちらに向けている。どうもできんよ。できたらとつくのとうにしてるよ。むしろ私は今までのシリ阿斯どうしようっ

て顔したいよ。

そんな中、空気の読めない魔王が疑問の声を上げる。

「じゃあ、勇者が来ると貴方もついてくるってこと？」

おいこの世界の魔王、特売品じゃないんだから。

まるでお得プライス 昼間のテレフォンショッピング、と言わんばかりの空気。

「勿論だ」

「勿論なの！？」

お前ふざけるなよ。このシリアスシーンぶち壊すとか、おバカ要員じゃないでしょうが。

「たいちよおおおお！あんた国家への宣誓はどうすんですか！反逆者として捕えられますよ？！」

カワウソが悲壮な声で叫ぶ。^{ツッコミ} 強く生きろ。

「俺は勇者様のために生きる！そして彼女の下僕になるんだ。ってわけでいい加減認めてください」

誰かこいつどうにかしてくれ。

もうやだ、せっかくのシリアスシーンをぶち壊されたし。つかこいつ、マゾ？マゾなの？変態なの？

「あはは、兄上ったら欲のない人ですねえ」

「思いつき私欲にまみれてると思うぞ？！」

亀の朗らかな笑みに、兎も叫ぶ。^{ツッコム}
おかしいな、ボケ：ツッコミは2・3のはずなのに、カオス具合
が収まらないよ。

魔王様うおっち魔王あんど勇者ぱーていー

わん（後書き）

すみません、分割します。

たぶん次回は近いうちに揚げられるのではないかと。（次回は「つー」です）

お気に入りが減って増えて減りました。

なんというか、すみません。

書く気力とか時間をなくしてました。

今は少しだけ戻ってきてます。

ほんとうならこれで勇者編は終わるはずだったんですけど、ね・・・
ドンマイ！

勇者編が終わったら友人が作ってくれたキャラとか出したいなあ
^

魔王様うつち魔王&勇者ぱーていー つー（前書き）

なんかもういろいろありまして、書けませんでした。短くてごめんなさい。

魔王様うおっち魔王&勇者ぱーていーっー

「今回の勇者たちは騒がしいねえ」

顔面（多分）の仮面をもてあそんでいた魔王（なんだかゆらゆらと揺れていたから）は、そのまま仮面を外す。体の一部じゃなかったんだ。……すると途端に静まり、息を吞んで魔王から視線を外さない仲間たち（若鷹のぞく）。どうしたの？

「魔の者はその姿で人を籠絡するというのが、本当だったとは……」

亀王子が呟いた。

……ってことは、またかよ！

「まさか美形？」

「美形なんてもんじゃないですね。第一王子が見劣りするほどのレベルです。あ、でも団長と競ってるかんじ……って、勇者様見えなんでしょうか?!」

おうよ、カワウソ。もはや慣れっこだよ。

というか、亀王子の顔を見たことがないから判断がつかないんですが。そして若鷹は残念な超絶美青年だったんですね。人外レベルのご尊顔をお持ちだったんですね。

三人が黒靄の美貌に釘付けになっている中、その超絶美形は何をしているかと言えば……あくびを凝らしていた。……こいつが他人に興味が欠片もないのがよくわかる。この調子で私への興味を失ってくれたらいいのに。

三人の凝視に居心地が悪くなったのか、黒靄は身じろぎをして「このままじゃ埒が明かなさそうだから」と黒靄は（推定）指先をちよいちよいと動かす。すると途端に視界が遮断された。全体が薄紫色のドームに引きずり込まれるような感覚。魔王の間から隔離されたのかな。遮断される寸前、獣たちの焦った声が聞こえた気がした。

「何これ。 勇者パーティー 獣四人衆は？」

おおよそ見当はついていないが、社交辞令として一応疑問符を出す。空気は読めます。

「とりあえず空間を遮断してみたよ。魔王同士の会話には、他者は存在しないほうが好都合だからね」

ああ、やはり。

彼は私の存在に気付いている。

私の様子など意に反さず、彼は言葉を続ける。嫌だな、と純粹に思う。自分勝手なのは嫌い。

「ようこそ、月竜国を統べる王。

ここは黒竜国。そして僕は黒竜国を統べる王。」

「黒竜国？」

聞いたことがない国名を言われ、戸惑う。『竜』とつくからには二度目の世界に属する国かもしれない。私の国を知っている事からも、その線は濃い。だが、歴史を学ぶ上では一度もその名は出てこなかった。

「あなたは新しい魔王だから知らないのも無理はないね。僕の国は、二つの世界をまたがっているんだ。そういう国はほかにもいくつかあるよ」

全て判っていると言わんばかりに頷く、彼に対する不快感は最高潮だ。

偉そうに彼が語った内容は、このようなものであった。

まず、彼の国は建物における階段と階段の間の空間　踊り場
みたいなものだそう。月竜国が二階で、人間の国が一階としたら、黒竜国はその階段の中にある。階段の上の踏み場は狭いから、踊り場のような階段と階段の間の空間に彼らの国が存在する。

「色つきの国は全部そういう立場。僕が確認できているだけで他には赤・青・黄・緑の四つかな」

どことなく、現存する国に沿った色の様な気がします。黒ってことは、月の出ている夜のイメージだし。

「多分気づいてると思うけど、この国は君の国とつながってるんだよ。」

赤竜国は火竜国と
青竜国は水竜国と

それぞれつながっている。

ああやはり…とか反応すべきなんだろうか。

あまりにも関心の薄そうな私に、魔王はちよつとしょんぼりとした。だって予測できるし。でも、一応気になることがあるので彼に質問する。

「つまり、私の世界移動は貴方の国を経由したってこと？」

「それは半分違うんだよね。君は世界を移動していない」

意味がわからない。

私の世界に、若鷹とかがいる国なんて存在しないし、ましてや『召喚』なんぞというふざけたものに引つかかるはずなんてないだろう。じゃなければ、なんだ。私の国と彼の国が同じ世界にあるというのか。

「この世界はね、二重構造になっているんだ」

ああ、なんてふざけた世界。

思わず噛み締めた唇から、鉄の味がする。だからこそ、階段を用いた国の配置の説明だったのか。

私の反応に何を思ったのか、黒靄は自分の役割について語りだす。

「人間・魔族両方の侵攻を止めるのが、色持ちの仕事。

……とはいつでも魔族側の侵攻なんて、そこに行くまでに他の魔族に敗れるのが常なだけだね」

「もしかして、自分たちの世界を統一してから人間側に侵攻しようか？」

「そうだね。だって、自分がいないときに他国に攻められたら滅ぶでしょ。だから統一しておけば憂えることはないし。でも、そこまで至るまでは誰も至っていないってこと。」

だからさ、と彼は続ける。

「今回の貴女には、本当に驚かされたよ。
色つきに気付かれることなく階移動をした君には」

しみじみと呟く彼には悪いが、私はそんなこと望んでいない。
私が欲しかったのは平穏で、奪われることのない生活。

「世界が同じというならば、どうして階層の違う者たちはお互いを認識できないの？」

「してるさ。僕の国を超えた先には、新たな大陸があることをお互い知ってるよ。知らないのは、月竜国だけ」

月竜国だけ？

私の国が知ってはいけない理由など、あるのだろうか。だから私の教育には一切出てきていないと？

それか、特殊な立場の者しか知らない。どちらだろう。

「正解。ぼくら魔王しか知らないんだよ。

本来は、魔王の引き継ぎ…もしくは、他国の魔王から知らされるんだ。

これは人間側も同じで、『王』のみが知っているんだ。……まあ、僕らにとってみればいい迷惑だよ」

たしかに、門番^{ゲート}の役割を持つ彼からしてみれば、煩わしいことだろう。ただでさえ領地経営という仕事があるのに、これ以上仕事を増やすなど苦々しいものだろうし。

だとすれば何故、門番である彼がその立場を放棄してまで侵攻へ踏み切るような状況を、人間は作れたんだ？

……いや、むしろ何故色持ちである国は門番ゲートの役割を担わされているの？

考えることは沢山ある。

だが、目の前の彼はそれを許してくれないようだ。

「じゃあ月竜国の魔王陛下、選択を聞かせてください」

彼は促す。

この世界の善悪を知らない私に、どうしろというのだ。
結局は、貴方人間も彼らと変わらない。

これは失望？

少し考えたが違う。

ああ、諦めか。

だから私は、こたえるよ。

「ごめんね」

「私はまだ子供なの。」

賢く生きれないし、最善を選ぶ術すら知らない」

損をする性格だと言われた。

確かにもつと賢く生きられたら、人生は楽だったろう。

でも嫌だった。どうして自分を殺してまで楽な人生を歩く必要があるのかわからない。

私は、我儘だ。

だから、ごめん。

あなたには応えられない

「だからこそ『絶対』を持ってる」

これは私のプライド。

「『自分の選択を後悔しない』って」

昔、教えてくれた人がいた。

傷つけられて、悲劇のヒロインぶって我儘になっていた私にガツンと言ってくれた人。私が出会った中で最高の教育者だった。

その人に出会えるような選択をした自分は、きっと幸運だった。

それまで辛かった。でもそれは、その人と出会い、向き合えるきっかけになったんだと思う。

禍は転じて福となるんだよ。

だから、私は自分の選択を後悔しない。

ねえ、教えてよ。

「貴方が愛した人と出会ったのは、人間を憎むためだけ？」

人間を呪ったのは、彼女を愛したからでしょう？

「私はまだ、身を切られるほどに愛した人を他者の介入で失ったことなんてないよ。」

でも、もし私が貴方のような立場になっても、貴方のようにには行動できない」

それは私が貴方ではないから。そう言われても否定できない。

「仇をとることは、悪いことじゃないよ」

私が貴方の立場でもきつと、同じことをしたと思う。

大人になりきれない私は、自分本位でしか考えられない。だから、自分を律することなんてできない。大切な人を傷つけられて、行動しないなんてできない。

私にあなたを非難する資格はない。

でもね、私は思うんだ。

「だけど、人間への復讐なんかに人生をかけていいの？」

人間はしぶとい。

はつきり言って、すべてを殺すなんてどれだけの時間がかかるのか。

「私だったら、その時間を全て恋人のために使うよ」

愛する人を、いつまでも血の中に居させたくない。せめて記憶の存在は綺麗なところにいてほしい。辛いことなど忘れてほしい。

これもきつと、我儘なんだ。

私が彼女だったらと考える。置き換えてみて、初めて考えが浮かんだ。

ああ、彼女もきつとこう思っている。

「だからどうか、お願い。」

「『その手を汚さないで』」

私は彼女を知らない。

誰よりも清らかな少女だったと彼は言った。それだけの情報しかない。

私が彼女だったら、きつとこんなことは望まない。

偽善だと言われようと、最後まで彼の中では綺麗なままでいたい。

復讐してくれるほど愛されてるって実感できてうれしいけど、で

も最後まで彼の中では『心優しい』と思われていたい。

私は彼女が羨ましい。

だって、心から愛してくれる人がいるのだもの

でも、馬鹿な少女だと思う。

愛する人をここまで苦しめて逝くなんて。

仕方なかったと言われてしまえばそれまでだけど、でもこんな結^{おし}末^{まい}は認められない。

やっぱり私は我儘だ。

『我、願う』

『月の狭間で微睡む竜が抱きし国の管理者が願う』

『＜選択＞に応えよ』

「私は、認めない」

魔王様うおっち魔王&勇者ぱーていー　　っー（後書き）

投げやり感が漂ってて申し訳ないです。

今回は、後半だけが出来上がってまして、前半は楽にかけました。しかし、この二つを繋げるのものすごく苦労しまして・・・

なんだか言い訳がましくて済みません。

次回からはコメディ成分多めで頑張ります。若鷹さんがやらかすとコメディになるようです。今回判りました。しかしラブコメにはならない安心設計です。（え

書き直すべきなのでしょうが、そんな気力と筆力がないので、次回にその気力を回します

こんな小説をお気に入りしてくださっている方には申し訳ありませんが、許してください。

みつしんぐ魔王様

月竜国では（前書き）

番外編とかは使いたくありませんでした
そんな話です。

みつしんぐ魔王様 月竜国では

月竜国の執務室

「みーっーかーらーなーい！！！」

「煩いよキーファ」

うごうごと蠢き叫ぶスライムに、大蛇の渾身の一撃が与えられる。人型verでの描写では、長髪をふり乱した美形がボオンキュッボン！の美女に回し蹴りされている。

男のほうは若干艶の薄れた銀髪から覗く隈が痛々しいが、それでも軽く美を超越した美貌は損なわれていない。むしろ触ればもろく崩れ去ってしまいそうな、繊細な美しさを与えている。決して乱暴などしてはならないような神々しさ……美形というのは本当に得である。それにも関わらず、手加減なしでドレスのスリットから覗くその美脚で沈める美女……特殊な趣味を持つ者にとってみれば是非変わってもらいたい状況にある。繰り返すが脚フェチなら崇めなくなるほどの美脚だ。

そういうわけであるために、彼女のその行為を指でくわえて見守る男共が現在、多数存在する。

美男美女のやり取りは見る者に眼福を与えるが、これからの記述はあえて魔王様描写風に綴らせていただく。ただの美形わんさかを求めるならば、この小説はお勧めできないのがよくわかってしまう。ええ、作者自身も美形描写に飢えているこの状況でのこの行為。登場人物が主人公を除きほぼ美形であるというのに、決して美形描写

がないのは美形好きに喧嘩を売っているとしか思われない。ちなみに作者は美形が好きだ。主に観賞用的な意味で。

月竜国では、連日連夜：とはいってもこの三日間であるが、国中がパニックに陥っている。

何故か。

それは現在、月竜国の魔王が姿を消してしまったからである。ゆえに国力を上げて、目下搜索中（探索中）である。……が、見当たらない。

他国の協力を仰ぎ（強制ともいう）探索の手を広めるが、やはり見つからない。この世界のどこにも月竜国の魔王の痕跡がつかめないのである。魔王が一人でも欠けるということは、世界が成り立たないことと同意義であるので、国レベルでなく世界レベルで一大事だ。

けっして自分から「魔王になります」なんて言ったわけでもなく、周囲に泣き落としされても脅されても拒否り、仕舞には嵌められて魔王になった彼女であっても、魔王であることには変わらない。最初の方の「しかたないか」という魔王様のセリフは、かつての自分の所業を忘れ去った結果にある。まあ、脅されたことには変わりないが。

ちなみにその嵌め方といえば、宅配便の受け取りの際、婚姻届にすり替えちゃいました と言うようなレベル……。印を押す書類を取り換えたのだ。騙される方が悪いが、まあ魔王様の場合は自業自得だ。

「危ないですねえ。私じゃなければお陀仏でしたよ」

大蛇からのしっぱインタをくらいながらも無傷でプルンプルンと震えるスライム。ゲル状のスライムはのほーんと抗議した。

「この規格外が……！」

盛大な舌打ちをする大蛇に全く恐れを抱かないスライム……スライムって、直接攻撃に強かったっけ？

「お前ら、イライラするのもわかるが、執務室（じつしつ）で暴れるなよ……」

テディは二人に抗議する。重要な書類とかあるんだから。もし破れたり失くしたりしたらテメエらが書き直すのか？ ああ”？ と
いうオーラを纏うぬいぐるみに、二匹はしぶしぶ従う。

「で、何の手がかりも見つからないのか？」

「手がかり……ってことでもないけど、私の剣が持ち出されたっぽい
のよね」

「剣……つつと、あのレイピアか？」

「ええ。あのよ」

大蛇と蛇が含みを持たせて会話する。それを横目にスライムはう
ぞうぞと魔王様のいないこの状況を嘆く。

「剣なんか魔王様の手掛かりになるものですか。……あ
あ、御労（おいたわ）しや魔王様」

「あのね、一応あの剣は私の血筋か魔王しか使えない代物なの。こ
れに該当しない者は触れただけで肉が腐り落ちるのよ。」

「ということは」

「ええ、魔王様は人間（あちらがわ）の境界にいる。

しかも最悪なことに、狂った血の集う国よ。」

執務室に沈黙が落ちる。

人間の境界と言えば、決して超えてはならないという盟約がある。
越えられるのは魔王のみであり、一介の配下を超えた次点で死、あ
るのみだ。

そして、『狂った血の集う国』とは、かつて大蛇が巫女として存在させられていた国であり、どの世代にも必ず一人は狂う者が王家に生まれる。まるで示し合わせたように破滅と再生を繰り返し、愚の踊る饗宴は開き続ける。狂った者が国を傾け、また別の狂った者が国を戻す。狂う者しか国を統治できない、そんな呪われた血筋

。魔王である彼女が居られるような国ではない。きっと、早く助けねば彼女まで狂ってしまうだろう。大蛇はそう確信を抱いていた。

階渡りをするのを無言で匂わせた大蛇に、スライムは推測を一つ呈する。

「しかし、貴方の血筋でも扱えるというのなら、彼女以外の者であるやもしれませんよ」

「そうだとしても、私の血を受け継ぐ者が在るのよ。この世界にとっても有益じゃない」

「だが、彼女の存在価値と比べれば取るに足らない」
「そうだけど、」

大蛇が更に反論しようとした時、無機質な音声 flowed.

『＜選択を受諾＞』

三人に緊張が走る。

「受諾？」

これは月竜国の魔王のみが行える術。

「ナディアス、どこで行われた？」

「……アリーの推測通りですね」

「ああ、もうやっぱりあの子だったら！」

怒りを隠しきれない大蛇は尾を床に打ち付け、低く罵った。そしてスライムに向き合う。

「私はこの国から動けない。だから、キーファが行ってちょうだい」
「わかりました。それまで保たせてください」

その返事とともに大蛇の展開した式に組み込まれ、姿を消す。

「絶対、帰ってきなさいね」

大蛇が震える声で激励を飛ばした。

その姿を悲しそうに見るぬいぐるみは、呟く。

「俺、いる意味なくね？」

「団長、気を落とさないでください！」

「そうですよ。団長は肉弾戦中心なんですから！」

周りの団長を励ます言葉が途切れることはなかった。

みつしんぐ魔王様

月竜国では（後書き）

こんなんですんで許してください
今月の忙しさに泣きそうです。

コーヒーでマックスコーヒーよりも甘いブツを作ってしまったり、
いろいろありました。

これについて今度詳しく語ります。では

うぉんてつど魔王様（前書き）

お久しぶりです。

今回は外側の話です。最初から最後までコメディです。

うおんてつど魔王様

ジェームズの苦悩、黒ドームの外側では

魔王同士が語らっているその外側では、待機組が破壊行動に勤しんでいた。

彼らの眼前に浮かび上がった黒い空間は、彼らの渾身の攻撃にも耐えている。某有名な灰被りの少女並に無言で耐え続けている。

憎き黒ドームをラキアスは血走った目で睨みすぎる。

「私ですら勇者様と二人つきりになったことがないというのに……！」

「何言ってやがるんですか」

ラキアスの言葉にジェームズは適切な言葉を返す。

先ほど魔王が展開した術式により勇者と遮断されてしまったラキアスは落ち着きが失せていた。その苛つきは今や嫉妬へと変貌しつつある。

魔王と勇者の恋愛物語、なんて巷の御嬢さんにもてはやされるお題であろうか。人外レベルの超美形と、片や美形とは言えない少女の身分差・種族差を超えた純愛ストーリー

一目見て惹かれあう男女。しかし勇者と魔王というお互いの宿命からは逃れられない…愛した相手が死ななければならぬというのなら、せめて私に手をかけさせて……。勇者 ver、魔王 ver、同時発売中、とかね。勇者を密かに愛する騎士……とか作中に出てたら尚良し。

……ああ、今この状況で血走った眼をした上司がいなければ
すぐにも書店に並びたい。

ジェームズはつらつらと現実逃避をした。だって団長怖い。普段
無表情な分、余計に怖い。

「うーむ、火精霊の炎でも焼ききれんとはのう」

「焼いちゃだめでしょう?! 勇者様ごと丸焼きになりますから!」

クルトの言葉にジェームズは適切な言葉を返す。

彼は先ほどから黒ドームを召喚獣たちの手を借りてどうにかし
うとしていたが、いつの間にか手段を選ばないようになっていた。
火精霊は召喚獣のレベルですらない。

白に近い巫女服の正装を身に纏う彼は、小首をかしげた。……可
愛いよ、可愛いんだけど、やっていることがえげつない。火精霊の
火なんて、一秒の燃焼で町が一個滅びる火力ですよね。というか何
故呼び出せたし。

こんなことを言っではいけないのは判っているが、黒ドーム頑張
ってくれ…。勇者様を守ってくれ。

「ならドラゴンブレスしてみようか?」

「ドラゴンブレスは猛毒成分が含まれているでしょうが――――!
いくらあなたに効かなかるうが、ここには凡人もいることを忘れな
いでください!」

朗らかな王子の提案にジエームズは常識を持てと叫ぶ。

先ほどから王子の笑顔が甚だしい。悪巧みしてます、な悪役顔だ。ゆえにジエームズは彼を一番警戒していた。実は、王子は国において最重要危険人物のひとりであったのだ。ちなみにラキアスとクルトもそれに含まれている。危険人物故に、この三人は常に監視対象だ。ジエームズは今現在、実質一人でこの三人の監視役をしているのだ。ついでにツツコミ役も兼任している。

普段はお付の者たちでさりげなく監視も兼任しているというのに、只今の状況は如何に。特別手当を貰わなくてはやってられない。実に不憫だ。

そんな彼は、ふと先ほどの会話を思い出した。

(……………あれ、今ドラゴンブレスとか言った奴いたよね。

ドラゴンブレスって、人の口から吐けるものなの?)

ドラゴンブレス

種族名・ドラゴンの攻撃手段の一つ。そのドラゴンの族(日、水、土、風、光、闇など)に応じたブレス。(例・水龍 水属性のドラゴンブレス)。下位ドラゴンでも、そのブレスには猛毒が含まれている。

どう考えても人間の口から放出されるものではない。

「……………吐けるんですか?」

「なんかできちゃった」

（とても軽いノリですねありがとうございます、もう嫌だこの国の王族問題児ばかり普通の王族に仕えたい。）

ジェームズは転職を考えた。

<選択を受諾>

「今何か聞こえた？」

王子の言葉に緊張が走る。

「この中で何かがあったのでしょうか。勇者の身に何か……？」
クルトの言葉にラキアスは表情を失い、ふらりと黒ドームに近づく。

依然としてその形状を保っている保護壁^{ドーム}に、彼がおもむろに触れようとしたとき……

ばき……ん

背後で転送魔法特有の術式が広げられた。

四人は緊張しつつも各々の武器を構えなおす。ラキアスはその場

から離れ、持ち場に着く。

緊張で張りつめた中、中心にいる人物が声を発した。

「ここですか」

うつすらと輝く陣の内から、その光を反射する銀色の髪を持つ男が現れた。四人はまぶしさにうつすらと目を細める。

銀色の男は腰まで届く長い髪を下の方でくくっており、この世界ではついぞ見たことがない髪留めをしていた。更に驚くのは、その美貌であった。ラキアスに慣れていた彼ら三人であっても、系統の違う美形であるため、魔王の時と同様に目が逸らせない。

侵入者は4人の視線を浴びながらも気にせず、凍りつくような水面の色を有した瞳を室内に巡らす。

「エンジエ？」

「まさか！エンジエは紫色の眼のはず……」

「どちらにせよ、あの美貌は人間ではないだろう……」

「誰だ」

混乱に陥った三人は総スルーで、人間でありつつも人外レベルのご尊顔をお持ちなラキアスは侵入者に問いかける。

（敵ならば切り捨てるまで）

愛用の剣を握り直し、ラキアスは男と対峙する。

しかし侵入者は不可解なものを見るように視線を彼らに向けた。

「貴方たちこそ何者ですか？私は忙しいのですから、邪魔するのであれば去ってください。」

「目的は？」

「それを言う必要があると？」

「……………ああ、そこにいらしたのですね」

ラキアスの問いにも視線を合わせようとせず、室内を見回していた男はふと黒ドームに目を留め、微笑んだ。

「いけない人だ。こんなにも私を振り回す」

くつくつと嗤う男に、ジエームズは

（やばい、勇者様逃げろ！）

本能からの警告だろうか。何故か勇者である彼女に警告を飛ばしたくなつた。本当に何故だろう。

笑いを収めた男がドームに近づいたところで、ラキアスがそれを阻止しようとする。

「彼女の関係者か？」

「彼女？たかが人間があの方を『彼女』呼ばわりですか。」

嘲笑する男に、ラキアスはさらに表情をそぎ落とす。

「彼女の関係者かと聞いているんだ」

「ええ、勿論ですよ。あの方は私の大切なお方………私はあの方のためならば、いかなることも致しましょう。」

あの方の幸せこそ、私の喜び！」

侵入者は素敵な笑顔で宣言した。

（あつれー、どっかできいたセリフだなあ）

ジェームズは遠い目をする。ふふ、つい最近自分の上司から聞いたような気がする。デジャヴ率はんばねえ。

「そうか。だが、あの方を想う気持ちは負けん！」

「はっ、ぽつと出の青二才が私に敵うわけがないでしょう！」

わーお、低俗な争い。

もしかして魔王と勇者の恋物語じゃなくて、勇者と騎士と謎の男（勇者と知り合い）の三角関係だったのだろうか。それは意外性を求める巷の乙女に人気でしょうがね。

ジェームズは再び現実逃避をした。

「つと、こんなことをしている場合ではありませんね。」

侵入者の男は、ラキアスと睨みあっていた状況をあっさりと打消し、ドームへとまっすぐに歩いて行った。そして触れるが、やはりドームは沈黙したままだ。

「さつきからそのせいで勇者様に会えない」

「勇者？……ああ、あの方ね」

侵入者は変な顔をした。しかし美形とは得である。そんな顔をして
も美形には変わらない。・・・・・・あはは、ビケ
イハホロベ。

ぺしぺしとドームを叩く男につられ、ラキアスもドームに触れる。

じよわああああああああ……！

ドームが溶解した。

「「「「.....」」」」

「兄上は溶解系？」

王子は真顔で呟いた。

うおんてつと魔王様（後書き）

ビケイハゝは、カワウソのセリフです

今回はどれだけ美形描写を使わないかに尽力しました。

あ、侵入者はもちろんスライムの彼です。

ナディ登場は美形描写を最初の方だけしましたが、それ以降は頑張
って削りました

個人的に若鷹が沢山活躍できてうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7150p/>

魔王様みーつ人外

2011年12月17日19時46分発行